

アキコには車座に加わって媚薬を試す気分は持てない。帰路の十キロをペダル踏み続けなければ帰れない。車座からは離れ、バイクに半腰を掛けた。片手にジュース、片手にハンドルに。暗い桜木の下宴会が広がる。座は暗がりに入っている。全員は見取れない。目が慣れて見回すと、男と女、皆が若い。構成はジーンテック各部署の雑多な集まりだった。

「皆さん、それぞれ別の部署ね。運動系のクラブでは無いし、どういう趣旨の集まりか分からないわ」

「花見結社ですぞ。うららかな夕べに春の風、便りとばさず花のもと、たがい集へば美を愛でる。百家斉放に天下を論じてみんなで争鳴だから大騒ぎとなちゃう」

「ここに好漢殿に助けてもらいたいわ。なぜ人材は集まらないの、何時欠員が補充されるのと鬼の士官に虐められている下働き女性が一人」

「姫や、人材には心配はいらん。若いやり手を一人見つけた。そこに座る若殿だ」

度会は車座の奥、花の下の薄暗がり指した。ちようど具合良い高さの切り株に樋田が胡座で乗っていた。彼はもう三十分前に退社していたが、花見結社に潜り込んでいたのだった。

「あら、樋田くんじゃない。あなた、いつりヨウザンパクに身を落とすの、皆が大笑いになった。

「車座の対面で樋田がムキになった。

「昨日の打合せの後、度会さんが貴重な忠告してくれましたよ。中身を知るにはアフターシックスを観察しなければ。そこで帰り際に飛び入り参加を申請し、座って観察していた」

「アキコ姫、奴には気を許すではない。モテまくっているから。ごらんなされ、若姫らが皆侍っている」

樋田の周囲には女性社員が集っていた。皆、アキコよりも年下の女性。樋田とは同年齢である。左右に、前にも女性達が半膝を崩していた。幾人かは樋田をうっとり見上げていた。

「樋田くんがここに座るのは偶然よ、彼が最後にやってきて、私たちがここに円く座っていたので、切り株を空けてやった」

直子である。彼女は度会が誇張した分を訂正したのだが、実はアキコに反発している。車座に入らずバイクのサドル上から度会を見下ろし、樋田には親しげに語り合うアキコに反発を覚えたのだ。

女神が降りてきたと錯覚するも罪なほど男目にも女にも際だちすぎ

た。  
 直子と並んで座っているやはり庶務課の女性が「座は閉じていな  
 いわ。真ん中に空席が一つ見える。島田さんはあっちに座って」と  
 アキコに迫る。ヤセ鬼とブットイ鬼の男性社員に挟まれる席だ。  
 「姫、樋田くんみたいに両手に花で歓待されるよ。でも女性の場合  
 は両手にナンて言うのかな」  
 「女を男が挟む、それってナブラレルっていうのよ。ご免被りま  
 す」  
 ヘルメットの緒を締めなおし、夜行用イエロウゴ―グルをこめか  
 みから下ろしてサドルにまたがった。前照灯をフラッシュモードに  
 切り替えて疾走準備は完了した。  
 「座を囲む皆に向きなおって花の吹雪を楽しんでいて、それでは良い週  
 末を」  
 信号が青に変わった。アキコは、靴底の固定クリートペダルの  
 留め具にカチリと嵌め、ペダルに一漕ぎ入れた。バイクはするりと  
 進む。二漕ぎ三漕ぎを加えれば、後影も残さず走った。青信号の変  
 わり目すり抜け、幹線を直進に取るころには、気になる人影はもう  
 見えない。夜目に止まらぬ高速で駆け抜け、後方赤の点滅が車道に  
 瞬いて消えた。  
 「この逃げ技には驚いた花見の一回。  
 「字面ではナブラれる、だけどー今は逆になってるのだよー、あ  
 れれ、なんて速いの、姫エー逃げるな」  
 度会が追いかけるようにも所詮は千鳥足のから回り、追いつく筈が  
 ない。アキコの「お疲れ様」の声が遠くの路面から渡った。  
 川辺には静かな夜が訪れていた、星晴れの夜空が土手に輝く。瀬  
 を渡る風はひやりと涼しく、星の瞬き映す川面には、若鮎の遊ぶ波  
 紋が時折広がる。ギャオとけたたましいのは嘴を上立したアオサ  
 ギ、しとめた獲物はフナか子ドジョウか。  
 流れも中流。小波跳ねるせせらぎの川面見下ろす土手の遊歩道。  
 自転車漕ぎの頭の上はまっすぐ夜空、その果ては宇宙に開いている。  
 多摩川の土手面は川面よりも五メートル高い。高さの分だけ宇宙  
 に近い。星の旅路は平均で四千万光年と計算される、長い旅路  
 のその終着は列島、東京のはずれ多摩の流れ。星屑、光どもは五メ  
 ートルの落差に戸惑った。わずかな差分に過ぎないが、土手におち  
 ればより早く、川面を愛するなら遅く崩れる。土手は暗がり川原は  
 無秩序、光達の多くが土手面を選んだのもその道理はあった。  
 多摩川において土手面が川原よりも常に明るい謎は、五メートル  
 の高度差であった。わずかな差であるが、闇の細道を高速走行に駆

けるバイクライダーにとってはとても嬉しい星屑の明るいプラス差分だ。

西から東、上流から下流へと、走行タイヤ音の摩擦音もしとやかに、細身ロードバイクが軽やかに駆け下りてきた。木陰に消えてまた抜け出でた時に、星屑のシャワー崩れが土手に転げて、キラリと輝いた。直後にも川原に星屑が散らばって、せせらぎに光の束がはぜて子魚が色めき立った。

バイクの乗り手は無言、肺の苦しさを呼吸の乱れに隠した。ペダルは分速百回転、試練のレジャー域にさしかかった。チェーンは唸りフレームはきしむ。ヘルメットを掠める風きり音だけが、夜のサイクルロードにヒュウヒュウと響いた。

乗り手はニキロメートルをすでに稼いだ、残る道程は八キロ。額や肩に玉と浮かぶ汗が吹き上がり、白い肌にきらめいた。腰をしつかりとサドルに矯め、クラウチングの背筋は丸く左右の脇を上腕と肘とで固く締める。赤と緑、まだら模様のジャージが胸と背を包み、暗闇に浮き出る蛍光ピンクのタイツが、太股と脚をあでやかに遊ばせた。

遠目からもこの豊かな姿態は女を思わせる。身にまとうきつちりのジャージがいくら押さえても、胸の盛りあがりには隠せない。タイヤがどんなに太股をむつちりと締めつけても、肉身のなまめかしさは夜目のピンクに晒される。

木陰を抜けた。ペダルが太股にエイツと持ち上げられれば、ふくらはぎがグイとペダルを押し込めた。クランク回しに勢いこめれば、それはバイクへの鞭の乱れ打ちに通じるしばきとなって、荒い鼻息吹き上げてバイクフレームはぐいと前に進んだ。

星屑の崩れ灯りの土手ロード、身を責めて息を乱してあえいで進む女ライダーはアキコであった。

顔を立て前方を窺う。ギアをもう一段高めに切り替えた。ペダルはそれだけ重くなる。

ギアの数を超絶の二十段とうそぶくが、全ては前進のみ。後退のギアは一段すら備えない。なぜならバイクの進むべき道程は必ず前にある。いつも未来に向かう車がバイクなのだから。

もつとも土手のロードで名誉か栄光か、そう気取ったところで、バイクライダーらに榮譽がほえむ機会はない。

行く手に待つのには転倒、衝突、墜落。その身体に残るは打ち身に擦り傷かすり傷、打ち所悪ければ骨折か不随で寝たきり、ときには坊主読経に鉦の叩き音チーンで果てる。チーンを未然に防ぐには行く道に潜む落としの罠を目ざとく見つける。このスポーツの極意でもある。

西風がフーと土手に流れた。アキコは風の向きから天啓をうけたのか、目線をキリリと立てた。その視線が前方地平を速やかに陰しく走査した。

まずはタイヤ直下からメートル先、注視要点は小石、ガラス塊、プラスチック、画鋲にジェット機の落下碎片などばらまかれを見張る。至近のスキヤンは無事に終わった。すぐに中距離十メートルの前方に移った。

さらなる緊張を目先にこめて、監視走査をやや前方に容赦みせず浴びせる。その帯域に見つけるべきは朽ち木か飛び枝、落石に流れ土囊、狸やムジナ等のヨタ散歩、動かなければ獣の野垂れの土手上末路だ。

中距離範囲にも妨害物は見あたらなかった。しかしアキコは緊張ゆるませるなど許さない。遠方百メートルの先にも疑いの視線を怪しく移した。この一帯により邪悪な危険が潜むのだ。

百メートルに飛ばすは怪しく青く光る眼光で、探すのは酔っぱらいか行き倒れ、人目隠れる男女の絡みあい。彼らは恋人などとの早とちり禁物だ。偽装テロか抱きつきスリかもしれない。道央によるめく影は赤提灯帰り、右に左にふらつくは徘徊老人か。最緊張のストレスをはねのけて、遠距離スキヤンをアキコが飛ばした。

アキコは遠距離スキヤンで百メートル見渡して、邪魔な落下物もよろめく老女やうろつき老人、やっかい呑んべえも跳梁していないと安堵した。

目の前は一本道、下りが長く続いて左に曲がるゆつくりの大力。遠心力をカーブの回りに利用すればバイクはたわむしタイヤきしむけれど、他の土手コースでは得られない高速を実現できる。そして今夕は背を押す西風の嬉しい加勢がある。

待ち望んだ最高条件のサイクリングがやっと現実になる、アキコは胸ふくらませた。

下り加減にペダルを踏み入れると、あれよと言う間にスピードが乗ってきた。脚が勝手に回り始めて、バイクはどんな高速域に近づく。脚回転をそのままにして、腿筋肉には痛さを耐えさせる。これまで達したことの無いハイスピードで、転がり跳んで進んでいのに気づいた。充滿する乳酸で膨れはじめた太股に「我慢するのよ」と励ましては、回転が少しでも落ちようなら「もつと回すのよ」と容赦見せない。一本調子で速度が上がった。

「漕ぎつづけるのよ、肺と心臓も太股みたいに我慢するのよ」

前夜のめつてペダルを回し、後ろにそつては踏みおろす。伸ばした頸から夜風が胸にしみこんで、胸の肌が汗をふいた。木立の脇を抜く間にもスルリもう一踏み、そして二踏み。血流が脚と腿、腕に

手に集中した。すると頭の血の巡りが当然減って、意識が遠のく。世界が入れ替わった。

アキコが進むのではなく、夜の川原景色が向かってきた。

音が消えた。ヘルメットの風切り音、地を噛むタイヤの唸り、そしてハイスピードにきしむサドルの悲鳴、それらが一瞬に聞こえなくなつた。アキコはもう前に進まない。ペダルを漕いでもただ空回りするだけ、少しもアキコは進まない。

大地の上のサドルの上が原点、アキコがそこに留まり、地表の全て、土手の木立と標識、藪も石くれも、前からどつとアキコに攻めてきた。景色が飛びかかり、かきむしり、打ち叩いて脇に抜けて後ろに去つた。

ロードライダーが陥る恍惚感、ライディングハイに囚われたのだ。遠くなる意識、大地と己身の逆転、恍惚のライディング世界であつた。手と肩は震わせながらアキコは、

「私は消えてしまふ。芦の川原にのみこまれ、枯れ枝土くれゴロゴロ石の荒地に放られ、せせらぎに放られ吸い込まれて消える」

取り憑かれたら、その後の思考はさらに単純化する。

「仕事も生活も、今夜のご飯も意識から消えて行く。  
アキコあなた怖いの、いいえ怖くないわ。だって確かめたばかりよ。十メートル先にも、百メートル先にも誰も、若者だって老人だって、酔っぱらいも、泣きじゃくる老婦も、誰一人も立っていないと。」

だからこのまま突き進む、大地が恐ろしいほど駆け寄っているわ、アアー気が遠くなる。」

血中乳酸が飽和を越えて脳内の浮遊酸素が残存ゼロで交差したから、体力限界を超えてしまつたが本人はそれに気付かず、なおもペダルをまわす。西から風が一陣、ザワワと吹き下りた。息絶えたアキコの背を風が押し、いやまさにスピードを上げた。

アキコの身体とバイクがふわと浮いた。ワーオと叫ぼうとアキコは真っ赤に口を開けた。口を開けたらふと突拍子もない考えが頭をよぎつた。

「このまま走ってバイクと一緒に空を飛ぶ。だってフツワと浮いたじゃない。」

加速して次の離陸の機会を伺って空に飛び出す、また追い風が吹いて、もっと速くと励ましてくれる。今夜こそ念願がかなう」

飛び上がりは勇気が必要で、跳び続けるのは技能とアキコは考えた。その根拠は、

「自転車には羽がないけれど、いったん飛んだら、慣性の法則で遠くまで飛んでいける。車輪をプロペラ代わりとして、高速で回した

ら距離が稼げる。どこまで遠くに飛ぶかは飛び上がる推進力、飛ん

でからの風の応力が絡む」

血中酸素ゼロの頭にある閃きがポツと灯った。

「この先三十メートルには急カーブの崖がある。飛び出すのはあの崖で思い切って踏切れば、対地スピード四十キロが宙に浮いて、川原上空で百キロに伸びる。」

光の速度までは無理かもしれないけれど、飛び出して車輪を回しての加速効果で宙に浮く、そして飛んで多摩川から、東京、日本から消える」と脳の血流問題などはねつけた天才的閃きだ。

長い左カーブがようやく終わる。終点は直角に左に切れる。まっすぐ進んだら切り立つ崖だ。下の川原との落差は五メートル、灌木が生え岩の尖頭が頭を出す垂直の壁である。直角終点にはあと十メートル残すだけとなった。都合良く、西風がビューと強く吹いた。「悲鳴を上げたら駄目、スピード落ちてしまう。スピードを怖れてはもつと駄目。怖くなってもブレーキを握るのはなおさら駄目。ブレーキ引いたらロケット飛び込みが出来ない、遠くに行かないわ。近場の福岡かシナ海あたりで失速、墜落してしまおう」

断崖の切り立ちをこのスピードのまま、助走を生かして断崖を力の限りに飛び越す。

「飛ぶわよー」叫ぶとバイクと自身の身体がフツワと浮きあがった。バンザイで「アレー」と歓声を上げて約束の中空に飛び込んだ。

飛び込む寸前のバイクはあまりにもハイスピードだったので、拳動がふらりと不安定になった。戻した腕でハンドルを握った。

バンザイの腕がハンドルに戻り、無意識に指先がブレーキレバーを引いてしまった。

「アレー、宇宙が消えた、私落ちるの……」

飛び込む空は消えて、河原が石ころとともに宙返りして、見上げる空までアキコの視界全体で大きく一回転した。まだライディンググハイの心情なので、自身は中心で不動、動いたのが宇宙と大地「天動の錯覚」にとらわれた。

もんどり転げて寝ころびながら、夜空を指して「アレーアレー」の大騒ぎ。

見上げる空には星、降り注ぐ光の屑も瞬きも何も変りはなかった。崖端でひっくり返って起きあがれずの仰向けのままアキコは、車輪がクルと回転しブラと揺れるバイクを見おろしてなぜか涙が落ちた。「昨日はもつと早くブレーキをかけた。崖までバイク一台分を余裕で残した。昨日はきわどい地点を確かに通過して、前輪が宙に浮いた。今日は後輪が浮いて飛び出した。」

でも宙に向いたのは前輪だけ、バイクはストーンと落下したのよ。

アキコ泣くことない、だんだんと宇宙に近づいているじゃない。宇宙に飛び出して、遠い砂漠に近づいているのよ」

自慢の迷彩ジャージは落ちる涙をボロボロと吸い込んだ。

「立てるのか」

しゃくり上げながら立ち上がったアキコ。救助者はその身にライトを軽く当てたが、打ち身も傷も無いと分かるや、崖を下りてぶら下がりのバイクを引き上げた。

「各部分にくまなくライトを当て入念に検分した。」

「すり傷が腕と腰に三カ所あるが骨と関節は折れていない、血の流れも見あたらない」

見立てはアキコの怪我ではなくバイクの損傷である。血の流れとはグリースの漏れで、これが認められたら関節が損傷している、すなわちベアリングが壊れたとなって、バイクはもう使えない。

結論は、「このまま乗れる」で「そちらは動くのか」とも追加した。

そちらとはアキコの身体で脚や腰、膝が回るのかと聞いているのだ。アキコの身体よりもバイク破損を心配していたこの男は生粋のロードライダーだろう。

「どこも痛くはないわ。それに私、泣いているではない。転倒して涙腺が切断されただけ」

男はアキコの言い訳を聞かず自身のバイクに戻りながら、振り返りもせず「走れば痛みは忘れる、涙腺も元にもどる」

「有り難う。制動が効かなく前のめりで倒れてしまったわ。ブレーキかけずに崖に突っ込めばよかった」

「さらに危険だ。急曲がりの下は崖だ。高速で突っ込んだら岩と衝突フレームが折れて使えなくなる」

相変わらず乗り手の怪我には言及しない。怪我は人が死ぬまで直るけれど、カーボンバイクは怪我して折れたら終わり。

「このバイクと私、飛べるのよ」

「何だって」

「バイクごと空を飛べる」

「お嬢さん、頭を打ったようだな。記憶が残るうちに帰れよ」

穏当な返事が聞こえた。

アキコは男に礼を述べるのを忘れていた。土手の暗がりだったので男の顔を窺えなかった。膝には痛みが残るので、残る二キロの帰り道はバイクを引いてマンションに帰った。

自室は六階、寝室は遠くに奥多摩の山々が望める西向きの窓。灯りを消した。

西向き窓を大きく開けた。窓のすぐの外は軒の低い住宅街なので

覗う者などいない。灯りを消せばレ―サー服を脱ぐのに気兼ねはない。胸と脇腹を締め付けていたジャージ上着を脱いだ。乳房と腹には日焼けは出ない、白い膨らみが暗がりには浮かぶ。きつく下半身を押しさえているレ―サータイツ、その腹口を下にまくり腰から脱いだ。太腿と股間がめくれふくらはぎが露出した。下半身、尻と股間は胸よりも白い。ジャージとタイツの二つをあわせて脱ぎ捨てたら、裸体が部屋の暗がりには白く抜けた。ジャージタイツの下には何もはないがレ―サー流儀である。白い肌は熱さで汗が沸き立ち、体液にじみの甘い香りが体中からむせてベッド脇に籠もる。股間に潜む女の芯からは粗い野性の臭いがむっこりに立ち上がる。きつと明日には今日よりも、臭いが強くなる。己の匂いにうろたえアキコはベッドに寝ころび息が乱れた。星の光りが裸のアキコをベッドに照らした。青く光る裸のアキコを、遙か遠方から覗く誰かがいた。多摩の山々だ。窓のすぐ下から屋根の低い街が、遠く西の果てに伸びる。その果てには山麓がそびえる。街の灯りが途絶えた黒い地帯が麓で、黒い森がその先につながり尾根筋に至り、いくつもの頂きに連なる。アキコを見下ろす多摩の山の頂きだ。立ち上がった。汗は背に噴き尻に滑り脚に落ちる。熱い汗粒が包むように身体に滴れる。スポーツの汗は心地よいとされる。活動を終え風の吹き間に身体を冷やせば、波が砂浜に消えるように汗は引く。しかし今日は違った、いつまでたっても火照りが残る。「ロケット発射に失敗してから、バイクを引いてきた。西風が吹かなくなつた。身体の芯が熱くなつた」。窓の風がようやく冷たい外気を運んだ。窓に顔を寄せ夜風に腕を曝した。「もう飛べない、転ぶのか」。バイクで幾度か土手を転んだけれど、裸のアキコは「転ぶ」を別の意味として、自分の心と身体の芯に問いかけた。その夜は寝付いても眠れず、うつつに意識はぼんやり残り、寝返りを打っては汗にまみれた。夜半にはいつて眠りかけて、ホトトギスの声に目覚めた。「ホッテンカケタカ」。山の麓、森の奥に棲む鳥が夜の街に下りてきたのだ。啼き声ははじめ遠くから、徐々に大きくなった、ホトトギスが近づいてきた。うたた寝するベッドの脇で「ホッテン」とけたたましく一声啼いた。彼はペランダに降りて、開けているガラス戸をすり抜け、アキコ



コの寢室に侵入したのだ。  
 「煩いわね、もう夜は深いのよ、お願いだから静かにして」  
 啼くのが本性、鳥に沈黙を注文するのは無理である。そもそもホ  
 トトギスは鳥の内でも大音量でけたたましく喉を張り上げるのだ。  
 「ケツキヨケツキヨケ」と続いた地啼きはなおさら煩かった。アキ  
 コはそれで目覚めた。するとホトトギスは耳元に近寄り、人の声で  
 ささやいた。  
 「アキコさんちゃんと起きるのよ。あなたを知っている人を案内し  
 てきたわ。愛を語りたいと願っている人、とっても素敵なお紳士よ」  
 ホトトギスが紳士とされる何者かをアキコの部屋に手引きし、今  
 やアキコの寢室に忍び込んでいる気配が感じられる。寢室闖入の不  
 届き者がなんで紳士であるか。  
 男が近づく足音をアキコはミシリミシリと聞いた。  
 隙間はその位置で固く締められている。ホトトギスは鳥ならばその  
 隙間を通れるけれど、人は無理だろう。  
 狭さをすり抜け忍び込んできたなら、その紳士は軟体人間、アキ  
 コに迫る軟体男とは誰なのか、確認したいのだが、まだ眠くて目を  
 開けられない。男はアキコの手を取り、やさしく甲を撫でた。その  
 愛撫に一瞬背がはねたが、優しい指先に快感を覚えた。  
 「私寝ているのよ。愛を語るのは無理、あなたは知らない人だもの。  
 それにしてもお節介なホトトギスさん、私の手を取っているお方  
 にお帰りになってと伝えて」  
 「お節介じゃないのよ、アキコさん。殿方はアキコさんとの愛をと  
 っても望んでいるのよ。貴女も殿方との愛を望んでいるのは分かっ  
 ているわ。」  
 彼つてとつてもいい人よ、アキコさんも目をぱちり開けて、そ  
 の方をご覧になって。今は睡眠よりも愛が大事。ベッドは寝るため  
 でない、愛を語るのよ。  
 ホテンツカツケ、トツキヨケキヨケキヨ  
 鳥啼き声に戻るとホトトギスは、窓の隙間をすりりと抜けて夜空  
 に消えた。部屋には男が残った。ホトトギス遣う良い人は、ベッド  
 のアキコにかしげき愛を語ろうと手をさする。彼の息づかいで忍び  
 込んだ男が誰か、目を開けなくてもアキコは分かった。  
 目を閉じたまま「あなたを誰かを知っているわ。なぜつてとつて  
 も良い匂いがする」  
 「アキコは空を飛べず、毎夜独り寝で苦しむ、だから慰めにきた」  
 男はさする手を甲から腕に、肩に伸ばした。だから慰めにきた」  
 「でも私、あなたは少しも好きじゃない。手を触るのは許すけれど、それ以  
 ないわ、私は舞い上がりたくないの。手を触るのは許すけれど、それ以

上に私を責めないで。乱暴に抑えつけないで。そこは恥ずかしい部位よ、触っては駄目」  
 夢とうつつの境をさまようアキコ、いやがるアキコを男は抱いた。  
 抱擁に陶酔するアキコのあえぎがベッドを揺すった。「カンニンして」  
 夜明けの前、アキコは安らかな眠りに入った。

### 三 焼けぼっくいは拾わない

リョウザンパクがカラオケ大会に様変わりした。今が去る頃合いと携帯の時間を見ると七時に十分前。ほぼ同時に携帯の振動がサキからのメールを伝えた。樋田は画面を開けると

「七時を少しだけ回るけれど必ず」

公園から橋までは十分、この場で退出にかぎる。すぐに樋田は立ち上がり、カラオケに熱中する自称リンチュウやらロチシンら好漢烈女達を車座に置いて花の吹雪に消えた。

金曜日のこの時間ともなれば企業団地の幹線道に勤め人の往来はパッタと減る。人気の見えない舗道を早足で抜ける。道なりにすすんで目指す先は朝川、北山台橋。十分前にアキコがバイクで駆け下りた道筋である。

花木の商売は水やり、運送配達などとかく男の手が必要で、源治は力仕事の肩代わりに翔に目をつけ、アルバイトを頼んだ。「時間と曜日は任せる、講義があいた時でいい」とは源治の取り計らいで、講義とゼミの時間を縫うから水曜と金曜の午後に落ち着いた。金曜にはサキが必ず店に顔を出す。座る場所はいつも同じ、ブーケテール器用の花束にまとめる。

花束まために力は不要、審美が重要でこちらは女の仕事。

仕上がった花束を抱えてテールからウインドウ、レジへ、運び回るのが樋田だ。

源治と民子が店に居残る間には互いに知らんふり。サキは目先の細かい仕事に熱中している。源治夫妻の二人は買い付け、配達で日中などこまめに片付ける。源治夫妻の二人は買い付け、配達で日中は頻繁に店を離れる。すると、ことさら用もないのにサキが立ち上がり、鉢植えを両手で運ぶ樋田とすれ違う。サキの腕が鉢の縁に当た

る。

「サキ、なんか用か」

「翔に用などないわ」

「ブーケが終わったらレジに座って店番している」

「この時間にお客さんは来ない」  
 「サキは何も知らないな、店番とは客を見張るのじゃない。店員がこまめに働いている忙しい店だよと通行する人に見せるのだ」  
 小学校から美容院の店番で鍛えた樋田の勝ち。ただしここまで、小さい歯が見えてサキが白く笑った。樋田にすり近寄り、肩を寄せてサキが翔に、  
 「翔、道を通る人だってこの時間にはいないわよ」  
 軽い調子のやり取りを三年重ねた。ずいぶん昔から知っている、互いに近親の感覚を持つに至った。

サキは源治夫婦の実子ではない。民子は地元の有才、大野の流れで、遠縁にあたる女性から引きとった養女である。戸籍ではイトコ同士ではあるが血のつながりはない。その血脈の事情を知っているから、イトコであつても、血のつながりがないただの友達で、年の差も近いから兄妹とも近いとの錯覚も覚え、立ち話には遠慮がない。会話が重なるうちに心情も変成してゆく。親族のくびきはすつかり外れて、紐一本をたぐり、寄せて放す男と女の駆け引きに移った。店の外での示し合わせは今夕で三度目。今回の話題はサキの留学、それと源治がテーブルで言いかけたある決心の探り。若い二人には重い主題となる。

北山橋は中央にせり上がるアーチを緩やかに描く。一方のたもとから対面を見渡しても、向かいはせり上がりに隠れる。時間通りに北山橋に着いた樋田は、目線を足元に落としながら橋のアーチを上る。時折前に目を向ける、西側からアーチを登っているから、対面する向かいは東の空。彼方はもう濃い夜だ。  
 西風が吹き抜けた。なぜか白い花が橋の向かいで揺れている。揺れながら樋田に近づいている。

「花が橋を歩いている」と錯覚した。  
 白い花であればコブシだろう。コブシは早春の花、連休は過ぎたこの日、コブシ花は残らない。ならば晩春のリラか。リラの木がなぜに橋を歩くのか。誰かが一枝を折って肩にかけ橋の上で振りかざすのか。かざして橋を渡るのは酔狂は誰か。姿は見えない。  
 「あと五歩を稼げばアーチが切れる。誰か分かる」  
 五を数えて目を上げたらそこが橋の頂上、リラを振る者は見えな  
 い。半円のテラスが川面にせり出している。二人が腰掛ければ脇が  
 はみ出る小さなベンチが中央に置かれる。サキとチャビがベンチに  
 座っていた。  
 川の上流、流れくる川面の先の遠方をサキが見ていた。彼女は白  
 いマフラ―を首に緩くまわし、両の端が肩と背の振り分けに流れて

いた。テラスに風がそよぐたびにマフラ―が欄干にたなびき川面に  
 も反射した。リラかと見たのは薄暗さの間違えて、マフラ―の白  
 い翻りと、鼻を地にこすり露払いするチャビの白毛尻尾を見違えた  
 のだ。  
 サキが振り返った。  
 何かを伝えたい気持ち勝ち勝ったが目をしばたくだけで、口元から  
 はその一言が出なかつた。風の吹き抜けに曝されていた頬から紅色  
 は消え、額から顎までの白い横顔は光るほど青い。チャビは猪首を  
 ゆっくりと背に回し、樋田を睨んだ。鼻筋を寄せるイガミ犬顔は翔  
 への不快をみせる。  
 「チャビ、翔でしよう、何故警戒するの」諫められてもチャビは尻  
 尾を振らない。  
 不機嫌なチャビを間に挟んで樋田はベンチに座った。イガミ鼻面  
 こそ収めたが、翔がその頭頂を指で触れると低い唸りをあげた。  
 「食事にくてくれたとき、チャビに肉と骨をやったけれど、一飯の  
 恩を忘れているのよ」  
 「骨をムジナに投げた。それが気に入らなかつたか」  
 チャビの不機嫌を探る二人の解釈は当たらない。賢い犬は飼い主  
 の心情を息遣いで理解する。サキは樋田との逢瀬を怖れている。怖  
 れる飼い主の心をチャビが悟つた。その時に後ろから忍んだのが樋  
 田、やはり彼が怖れの元凶と忠犬なりに事情を理解した。  
 「こんなに寒い風とは思わなかつた」  
 「朝川はどこでも西に開いていて、上流は森につながりその先は山  
 の麓と山の尾根。山から下りる西風に渡り回廊を提供している」  
 二人はしばらく無言で冷たい川面を見ていた。溜まった塵芥と湿  
 気を西風が吹き飛ばして、どこまでも見渡せる真っ赤に透明な夕焼  
 けが目の前にあつた。川面が夕焼けに染まれば赤、遠く向こうに多  
 摩の山々も赤に染まつた。山並みの南向の延長に富士が夕空にそ  
 の山麓を映していた。生まれればかりの素裸コニ―デ、剥き出しの  
 富士の肩と胸が赤い夕焼けに曝されていた。  
 「しばらく外に出ることにした、新しい地に」  
 翔は表情も変えない。  
 「フランスに行くのか」短い問いに息がつまつた。  
 サキは先月に都心の大学に入学したばかりである。教養部の講義  
 はおおかた欠席を続け、専門語学校で仏語の特別コースに通いはじ  
 めた。今月にそのコースを修得すれば六月からはラスパ―ユ通りの  
 姉妹校の上級コースに登録できる。東京からパリにまたいでのコ―  
 スが九月に終了できる。  
 日本の学制は一年の開始は四月だが、この季節の開始は世界的に

特異で、どの国も学期の始まりは秋の九月と決まっている。九月は登録期間で講義の始まりは十月にずれ、四月から十月までの半間の間隙を狙い語学を修得すれば、フランスで学籍を取得できる。日本の高校を卒業すればフランスの大学入試の資格を取得したと見なされるが、海外からの登録申請者は仏語の能力を証明しなければ、実際には学部生としての学籍は交付されない。希望者の多くは語学力が限定的なので、文明コースとされる勉強コースへの入学を認められる。

学部の授業ではない、ガンボやブリキナファソなど、比較的文明が劣るとされる諸国の学生士に混じり学ぶ。共和国恩寵の講座なのだ。

文明コースに登録するにサキは飽きたらず、学生らが学ぶ学部に入りたい。中学校からの語学勉強の蓄積からすれば学籍の口頭質問を通過するのは間違いのないけれど、「フランス学生と同等に」講義を理解するため、専門学校の特科コースに入った。

「ラスパリュ校を終了してバックと互角の証明が取る。学籍申請がどこにでも出せる」バックとはバカロレア、大学入学資格の短縮形である。

かの国の学制では入学して二年間で単位を取得すれば学業証明書をj得る。日本で言えば「教養課程修了証明」となるがこれはフランス社会で立派に通じる学歴である。多くの学生はまず二年の修学をmeざす。

「その二年の間は日本に戻らない」

「東京のコースは来月で終了するのか」

サキは首を縦に振るだけ。チャビはいがみの鼻面に戻り、面構えだけでブーと鼻息を漏らし「当たり前だ」と補足したのだ。

「大学はエクスを考えている、明るいから」

「プロバンスの核都市エクサンプロバンスである。エクスとは古代語「アクア」から派生したロマンス語が起源で、意味するところが「オー、水」である。市や街にエクスが冠せられれば、豊富な水脈で地下が涵養される城塞市と決まっている。公園や街角にはかならず自噴水が配置される。

「今まで仏語漬けた。しばらく続くわ」

「その先もずっと仏語漬けになるじゃないか」

「向こうでは学んで一人で暮らす」

「寂しくないか」

「寂しくなるけれど、しばらくは一人の生活をした。うな残りの私の人生はこれまでの十九年より長いのか、未来を占うなんて出来ないけれど、人生を尺度に取れば二年は一瞬。しか十九から二十一を生きる二年は短さ越えて、少女にはとても長くても

重い。  
 過ぎ去れば二年はきつと一瞬の追憶だけれど、生きるその期間に  
 身を置く私は、寂しさだけを友にして生を見詰めたい」  
 「生きるとは秒と分、時を積みあげ一日に閉じる。朝に息を整え昼  
 に働き、過ぎる日を夕べの壁に浮かべて、夜の沈黙を怖れる。  
 口を閉じて食べ、目を結び書に馴れ、冷たく寝て不機嫌に起きる。  
 色にたとえれば女の一人は二つの色しかない。それは灰と黒。灰  
 の生活に渴いて、黒の闇に心の飢餓を閉じこめる。生きるとは諦め  
 と一人で学ぶ。  
 黒に自分を塗り込む女がいれば、彼女は寡婦か老女、あるいは一  
 人生きる女。  
 十代の最後と二十代のはじめと合わせての二年、それが新しい人  
 生の始まりで、その始まりが呪いの不毛の黒でも耐える。  
 収穫の風、小麦色の波、豊穡の秋がいつかやって来て、私を祝福  
 するならば、闇に飢えた一人の女も、喜びの灯に暖められる」  
 サキの口調は、冷たい地声に変わっていった。六月からの生活は  
 灰と黒、渇きと不毛、彼女は不毛に耽溺するのだろう。  
 プロバンスの明るい陽光を選んだ理由が、冷たく暗い生活を送る  
 ためだったとは、聞き終わって樋田はその決心に圧倒されるばかり  
 だった。彼女の真の意志を理解したと確信できた。  
 体付きと顔の表情に幼さを隠し残すサキだけれど、ベンチの少女  
 はすでに迷いを一切そぎ落とし、心を裸に戻した決意を語った。そ  
 れは少女を跳び越えた一人の女の振る舞いで、橋の上のサキがその  
 女だった。  
 彼女にしてもこの逢瀬で、翔に全てを語りたかった。語った後に  
 「サキ、行かないでくれ」と翔が引き留めたら、半年かけた計画を  
 反故にするかも知れないし、その一言を胸にしてエクスに旅立つか  
 も知れない。  
 ただ何も伝えず突然に、翔の前から姿を隠す。それだけを避けた  
 かった。  
 出発する残りにはあと十日。もしその後の再会があれば、夜の渇き  
 の二年を経過してからであろう。堪える支えは翔かも知れない。そ  
 れと気付きながらしかし翔から離れる。十九歳の決心だった。  
 不毛の夕べに己の心を反射したい、十九歳の決心だった。  
 サキが説明する間、樋田は表情を変えず、賛成とも反対とも表明  
 しなかった。サキに残るは翔の本心の確かめるだけだ。沈黙が  
 二人に戻った。サキが、

「聞いているの」

「ああ聞いている、十日もすればお前はこの町から消えるまで聞いた」

「遠くに行くのと会えないのとは違う。私が多摩に戻らなければ、あなたがエクスに来ればいい」

「エクスにサキを訪ねる。何をする」

その時、サキの口元がわずかに引いて、頬に皺が一筋だけ刻まれた。川面に湧く夜の霞ほど薄い微笑みだった。三月前には高校生、少女の面影を残していたあの頃のサキではもうなかった。

「幾月幾年かが去って、見知らぬ街角、二人を知らない橋と川。エクスにある北山台橋のテラス、ベンチにあなたと私が腰を掛け、翔は私に何を話すの。やあこんにちはと挨拶しエクスの多摩の朝川の、エクスにそびえる富士山のコニーデ姿に見とれたら、晴れか雨かのお天気と、ガールフレンドボーイフレンドの話題に移って、ごきげんようさようならと別れるの」

「エクスの富士の夕焼け赤尾根を前にして、橋のテラスで私がエクスはサキの手を握る。エクスは私に何をしてくれる」

「それはこれから十日のあなたと私、付き合いの軽さと重さの比重にかかると知ってパリに飛びたちエクスに渡る。あるいはサキは翔など知らずに、ふと遠くに旅にでる、どちらも正解。でもどちらかは幸福な正解で、もう一方は不幸な正解。どちらが幸福で片一方が不幸かの正解は、今は分からない。過ぎ去るあと十年、二十年は遠い未来、しかし人生はもう半ば、どちらとはその年の結果が教える」

「サキは言い切った。言葉まで一拍置いた。時間が経つから忘れるのでない。遠く思いも心に寄せる。離れる距離や別れる時間はキロメートルでもカシオウオッチでも測れない」

翔は変わらず川面を見下ろしている。エクスに朝川があれば、あちらでもせせらぎを見下ろすのか思いながら、

「思う心の重たさ軽さ、キロでもグラムでも計れない」

「クーーン」チャビが鼻を上げた。散歩に出る頃合いとおねだりだ。

ベンチを立ち橋の欄干を後にして、二人は土手に遊歩道をとった。十分ほど下流に向かえば「連れ合いの橋」が左岸を右岸に結ぶ。散歩には人の少ない左岸をとり、サキはその橋で右岸に戻って丘陵に帰る。チャビとの散歩取り決めだ。

遊歩道には街灯が設置されて進まない。夕焼け残りとも星の瞬きを頼りに二人と一匹がゆっくりと進む。チャビはサキのすぐ脇、その場

こそ忠犬のおれ様の居場所だとノシと歩く。

「ある女性と知り合いになった」

そのきっかけがインターンだと翔は説明しない。しかしサキはすぐにジーンテックの女性だと勤を働かせた。「樋田翔さんの居住の確認」と電話してきた人事の女性かと疑った。名はしっかりと覚えている。「島田アキコ」はつきり本人から聞いた。

「年上の方なのでしよう、会社勤めだから」

「五歳上になる。年上だから仕事の経験、それに人生経験も多いのだと思うけれど、その年齢の差には惹かれていているし、歳の差に抵抗もある」

電話口での声質にはしつとりと落ち着きが聞こえた、二十五歳をいくつか越える筈とサキは勘ぐっていたので、翔の気を惹いたのはやはり彼女、疑いは確信にかわった。

「惹かれるってどういう意味なの。遠くから見ても素敵だと思うの、その女性と交際してすばらしいと思うの」

「いま賭けている」

何を賭げるかの説明は続かない。二十二歳の若者が五歳年上の女性に賭ける何かとは、続く言葉を聞く必要などない。それは人生だ。サキは思わず反発した。

「ウソ、翔は年上の彼女に人生を賭けないわ」

「お前に賭ける一瞬がかならず訪れる」

連れ合い橋の中間にかかって別れの間際に翔がサキの腕をとった。「最期の言葉がいつも気になるのだ。誰にも言わなかったけど、サキには知ってもらいたい。それはマツ：ヨ：」

そのマツヨとは涅槃から翔を待つとの意味ではない。生前に必ず教えると約束していた実の父の姓名である。救急隊員から間接的に聞いた状況を翔は明らかにした。

聞き終わってサキは以前源治が「その名はヨツチャンだ、上の姓は言わなかったが」と漏らしたのを思い出した。「これだけは翔に伝えてはならない」と口止めされていたので、翔には知らせていかなかった。

翔の説明に源治の聞き伝えを合わせれば、マツが姓でヨは名前、愛称の「ヨツチャン」をつなげればマツヨは実名に肉薄しているようにうだ。

「それに近い名前の持ち主に最近出会った。でもヨシではなくギと読むのだと否定した」

「その方はマツギスケとかギイチなの」

「近い名前だ、近いだけでその中年は関係はなかった、つまらない



「今日の日散歩が最後。明日と明後日は週末、私は最期の追い込み、翔の楽しい週末を願うわ。」  
「もう一度家に来るのよ、金曜日には必ず連絡を入れてね」  
橋の中央で二人は分かれた。結局サキは「ヨッチャン」を伝えず、これからも伝えないと決めた。

翌日の土曜日、アキコのマンション。  
実家を訪ねる時間がアキコに迫っていた。スーパーに買い物に出る程度の気楽な格好におさめ、白粉を軽くはたくだけ、薄いピンクの口紅を上唇に軽く引く薄化粧でまとめた。鏡の自分を覗いても、これで十分と安心した。そもそもアキコには厚化粧は似合わない。実家ではあるが両親は死んでいる。姉夫婦が曲折のすえ土地と家宅を継いだ。  
姉の史子との約束は昼食を共にで、姉は夕食を望んだのだが、夕方にはある人から連絡が入るとの予感にアキコは気を取られて断った。もう一つ別の理由はある人を避けたいためだが、姉には言えない。  
電話してくる誰かには見当がつかない。ホトトギスの夢の見あとの寝起き悪さ。朦朧とした気分朝を迎え、重い頭の中で夢を思い返して、夢の中にしても「空を飛ばなかった」と気落ちしてしまっただ。  
飛びはずれて転んだかも知れない夢の流れに不満を抱いたからかもしれない、夕方には「誰かが誘う、何かが起こる」と漠然と期待した。その誰かに会ってどうなるか、飛ぶのか転ぶのか、期待と逃避をとも感じている。  
繰り返すだけで乱れたままの思考は整理できずに、姉宅に向かった。

アキコの父勇作は大手とされる銀行に勤務していた。出世階段を登りいずれは常務との評判まで立った。  
しつこい咳に悩まされていた。ある朝出勤の前、鏡をみたら顔は墨汁を塗ったか黒く変色していた。「タチの悪い風邪」と自前で判断、通院で直すつもりで近くの医院に立ち寄ったら、そのまま入院となった。  
悪魔の嗜好その名はタバコ、両切りのピースを日に半缶開けていた。ガンが肺腺に巣くっていた。手術が終わっても体調は戻らず、医師は再手術が必要と予告していた。手術が日程を決めようともしない。ある夜、近隣にも響きわたる修羅の叫びを上げて、洗面盆にも余

血を吐いて死んだ。父の死は家族に悲しみとローンを残した。銀行に母のクミは窮状を訴え、小さな支店の客案内として雇われた。会社つとめの経験などないクミ、案内係とは苦情と怒鳴りの防波堤であり、余計な気遣いと不本意な謝りを強要されるだけと知った。言葉の粗い下町客のあしらいには親しめず、帰宅すると酒瓶を傾け冷やをコップであおった。程なく依存症となって入院を繰り返した。その頃、姉の史子は卒業し鉄鋼の専門商社で働いていたが、アキコの学費が苦しい。せっかく難関の私立校に入れたが、中退して窓口事務員に銀行に頼みに行くとも相談した矢先に母が肝臓で死んだ。クミの保険でローン残債がやっと返せた。残ったのは立地のよい住宅地にある広い土地と大きな家、相続するの姉とアキコの二人。中退まで決意したアキコだったが卒業に至った。英語力が評価されて都心の堅い電子企業に就職できた。しばらくして姉が井田弘と結婚した。史子と同じ会社、同じ職場の三年先輩、初対面の席でアキコは、弘に好ましい印象を持ってなかった。第一印象で受ける好悪の判定は真理。姉夫婦との住み合いを改めるべきと思ひ知らされる不快事がアキコを襲った。土地と建物の半分はアキコの名義であるけれど、彼女が占める間は二階の自室のみ。しばらくは同居を我慢していたが、姉史子には訴えにくい事情に当惑した。整理してタンスの奥に重ねる下着が消える。一枚の白いパンティが消えたので、片付け忘れと思っただが、その不明が始まりだった。パンティを何枚重ねて穿くのかの質問に「パンティは重ね穿きしない、一枚だけで着用する」と答える賢女は多くとも、タンスに何枚を所有するかに答えられる女史は少ない。一枚のアキコも所有するパンティの枚数は知らない。知るのにはタンスに一枚一枚たたんで仕舞う時に、模様形状からそれをどこで購入したかである。ベージュ地がくすみ始めた気に入り、それを買ったのは、渋谷駅ビルでとすればまだ学生、一年以上も前の購入である。踊り場のよな通路の小さな構えの店で購入した事は覚えていない。布地がおさえベージュの裏地に薄茶の染みが入った。汚れている。女の誰にも起こる生理現象で、染みの濃さを見れば筋で汚れている。誰にも起こる生るためにタンスの奥に仕舞った。それが消えていた。白パンティに続いてであった。原因に見当がつかない。

その後も履き続けたパンティが消えていく。一枚二枚、三枚と消えた。こんな説明付かない現象に巻き込まれ、この事象をネット検索で調べると、使い古し女の下着のある種の男は偏愛すると知り、男ならばこの家には義理の兄しかいない。縁のない義理とはいえ兄、性にか井田弘とはその種の男だった。縁のない義理とはいえ兄、性にからまる嗜好の裏面に鳥肌が立てば、同じ屋根の下に住む妥協は失せる。

盗まれたとの証拠はないから姉には伝えられない。そんな不名誉を告げるたら姉とのつながりも消える、伝えても姉は「間違いよ、しつかり数えて」と受け流す。鈍さと楽観が姉の習性。誰にも伝えないと決め下着の棚を施錠した。

そしてある夕、脱衣場で着替え中のアキコを弘が覗いた。突発的な事故を装う、見えすいた厚かましさと、とぼける目付きの奥の怪しい瞬き。義兄へのアキコの嫌悪は飽和点を越した。

次の朝、姉に別居を申し入れた。半々に相続したアキコ分を減額して評価して、一人で住むに足るマンションをアキコが購入し、姉夫婦がローンを組んで負債を肩代わりして支払うと合意した。

史子はアキコが母の味を好みと知るので、九州山里ちらしを用意してくれた。

なじみの魚屋で材を仕入れ、酢を効かせた飯には白身と母から継がれる秘伝の具が加わる、それは干し椎茸と干し筍の旨煮である。炊きたての酢飯にザクと切り混ぜられる椎茸と筍、白身と白胡麻がふんだんに被さる。かの地の陽の明るさと風のかぐわしさが味に込められ皿に盛りつけられる。

山の香りが母の自慢だった。

盛られた皿を前にして、クミはそつと箸を置き、目を閉じた。生まれした山地と生きるこの世への感謝を問いかけている。沈黙儀式の一瞬は食への喜びでもあった。目を閉じた母をアキコは眩しくかすめ見て、食とは美味でも滋養でもない、まして包丁の技術でも甘辛味の批判でもない、それは生きる歓びとひたむきな祈りだとアキコは知った。

思い出はいつも悲しい。食に籠もるアキコの夏は、十二の旅行を思い出した。中学生になつて初めて一人旅を許された。母の故郷は宮崎。起点の伸丘はその地方で繁華な街だ。乗り込む支線は小さな気動車、川にさかのぼり山の麓を分け入るだけの緑の鉄路、降り立った駅の名は五瀬日影。

谷間をくねるせせらぎに鮎の背がきらりと光り、今が真昼と知らせた。十二歳の一夏を谷間で、アキコは一人読書に過ごした。毎夕、叔母とともに座した西日の映える夕餉、干し筍が食卓にそえられた。

自宅に戻ったのは、翌日から秋の学期が始まる夏の終わり。アキコの帰宅を喜ぶ父、しかし顔色は黒く、再会の喜びを語る途中での咳きこみは止まらなかった。筍を歯に噛み類に椎茸を含む。思い出を甘さと酸っぱさを共にのみ込む。目が潤み視界は滲み夏のせせらぎは消えた。十五年の前、あの年の夏の輝きは今でも目に眩しい。せせらぎの岩根に立つ少女の脚の色つやは、熟れた麦穂の小麦色だった。五ヶ瀬のせせらぎを夏にたとえれば、二十後半は秋の色になる。十代にましておつややか、薄い黄のにごしがかかる白素肌は、女の秋、豊穣の証か。椎茸を噛みながらアキコの思いはとどめない。黙りこくりで時をむさぼり、ふと関連のない独り言を呟くアキコに「いつもの癖が出た」と史子はあきれれる。アキコの空想癖に慣れているので食卓に一人置いて後片付けに立った。

静かな午後が物音でかき回された。悲しい味からアキコは追い立てられた。玄関が騒がしい、戸がガタと乱暴に開られ、靴が踏みならされ靴を床にドツサと捨て置かれた。それらが騒音となって居間のアキコに飛び込んだ。最後に大声が飛んできた。「さんざんだった。チョコレートはすっかり取り上げられた。懇親会も流れた」

井田弘が帰ったのだ。お昼を共にするにこだわったもう一つの理由は、「弘はゴルフに出るので夕方にならないと戻らない」と聞いたためである。コンペの後には懇親会と称して、ビール宴席が用意されるのが社用ゴルフの常なので、二次会に流れれば帰宅は崩れて、必ず夜。アキコは迷わず昼食を選んだ。

歓迎されない帰宅、その声を聞いた時刻は二時を回ったばかり。懇親会が流れたとは言い訳で、井田がキャンセルしたのだ。大騒ぎ好きの井田がこの日に限って早い帰宅。やりくり巡らした真の理由に、アキコはそれと思い当たる。それだけに「一緒に食べる」と告げた。出かける前に史子が「昼食をアキコと一緒に食べる」と告げた。弘は主人なので、留守に客があるなら伝えるべき、史子は単純に判断して伝えた。弘は聞き流す振りして「ああそう」の気のない返事で迎える。タクシーに乗り込んだ。史子は「ああそう」の気のない返で「プレー中は懇親会を欠席する策略を巡らせた。周囲に「肺炎をこじらせ寝込んでいる、今日だけは早く帰らないと」史子を病気に仕立てる不誠実な嘘をばらまいた。

井田は玄関から身支度も替えず食堂に直行した。皺だらけの汗く

さいシャツの弘がアキコの目の前に座った。懐かしい料理と夏の少女の追憶にひたった贅沢な流れは断たれ、赤ら顔の着古しパンティ偏執狂が目の前で大汗をかいている。

「ひさしぶりですねアキコさんと会うのは、元氣そうでなによりですわ。予定の懇親会があるとある事情で流れてしまった。ニラウンドで帰った訳です。偶然にもアキコさんに会えた。その方が良いとお告げだったのかな。もっと頻繁に……」

早口でまくし立てた。暗然としてアキコは戸惑うばかり。滅多に訪れない原因は弘を避けているだけだが、彼はそれと気づかない。手皿に椎茸筍の旨煮を盛りあげ、爪楊枝でしゃくってむしゃと食らいはじめた。歯をむき出して食べる作法に悪意はないのだが、その食べ風情には食への感謝は見えない。

九州山岳地の風土を凝縮した秘伝の食、恩寵の供えを食する感謝など彼は知らない。

「今日の味は幾分かマシだな。でも筍はクセが残っている」

日焼け真っ黒の犬食い振りが食と風土そしてアキコの思い出を陵辱した。食事を終えてすぐに帰るべきだったと後悔し、アキコは音も立てずに食卓を離れた。

帰宅の前に後片付けを手伝う。食器洗いを手伝うアキコが横の史子に揺らぐ心を漏らした。

「お姉さん、私転びそう」

「転ぶ」と泣かれて、史子とはとっさにはその意味を理解できなかった。言い回しにうかがえるアキコの不安を聞き取れば同性であるからに、女が常に心の奥に隠す「ひよんなきっかけの暗転」と理解できた。

洗う手を止めて、史子は立つ妹を脇に見つめた。泣きじゃくっていた。

「遊歩道で自転車で転んだって言ったね。もう転ばないと約束したでしょう。高速の自転車は男のスポーツなのだから、無理な速度で走らせたらダメ、人生もそう」

史子は「転ぶ」を文字通りに理解したかに諭し、「人生」を加えた。初めから心が転ぶと知った上で、その直接話をさけ暗喩を口にしたのだ。姉の思いやりにかかわらず、洗う手を止めてアキコは、さらに二度も三度もしゃくり上げた。

「きつと私、身体ごと転んでしまう」アキコも身体転びを伸べながら「心の転落」に暗喩を敷衍した。

「転ぶ」決めつけて、若い女が泣いて訴えるのは、のっぴきならない男女の関係にはまる、愛の深みに泣くのだ。

「転ぶと知っているのなら逃げるのよ。転びますわよと他人事みたいに観察していないで、その落としの罨に近づかないのよ。泣いて歩いて前も見ずにすっかりしょげていけば、罨が隠されていると気付かないのよ。罨にはまったく心はもつと痛い。あなたは今が大事。まだ若いし傷もない。アキコほどの綺麗さだつたら必ず良いお婿さんが見つかる」

姉の心配はアキコへの思いやり、この助言は正しい。アキコにはその心遣いは正当すぎた。

「有り難うお姉さん、転ばないわ」落ちる涙をエプロンで拭いた。

マンションに戻り静かな午後を独りすごした。涼しい夕方が訪れた。このまま無事に夜に迎えれば、何事も起こらずに土曜日を越せる。日曜とは情性の一日で、ただ土曜の風習を繰り返すだけだから、今日が平穩ならば明日はきつと退屈な一日。怠惰に寝ても過ごせるだろう。今までの週末と同じだからこの週末だって平穩なれと祈り、転ばないわとアキコは安心し一人部屋に籠もった。

暮れゆく茜の西空を見ながらアキコは、

「昨日の夕べ、西風が背を押し、空を飛ばずに転んだ。

今日、誰かが私の背をもつと強く押す、その一突きがこの午後にあるはずと待っていた。でもそれは起こらなかった。転び願望のお馬鹿さんアキコ、山のホトトギスと本性は同じ」

遅い午睡におちた。

伯父の源治と妻民子が「花材を探しに」北に旅行するのは、来週の土曜の出発と樋田は思い出した。サキは連れ合い橋の別れで「翔を知りたい、熱い思いをエクスに持っていきたい」情を変えずに迫った。「次の金曜日に連絡入れて」と誘うのは、週末に木暮家で二人だけの夜を過ごそうとの誘いだっただけ。

樋田は身の震えを覚えた。すがる気持ちでメールを入れた。

メール着信にアキコが目覚めた、茜色で真っ盛り春の夕空が窓を飾っていた。メールの主は翔、細かな文字がスクリーンにはみ出ていた。

「週末、なぜ樋田くんがメールを」と違和感を覚えたが何用かと探ればすぐに読み下した。

「アキコ様、お休みの中、お騒がせ迷惑：」で始まり「お会いできませんでしょうか」と結んであった。

アキコは音声電話で返事する。着信音と同時に樋田がでた。これまでにない早い口調となって事情を説明した。何かに追いつめられている、その心情をアキコは自身の状況と照らし合わせて推察できた。すでに樋田はバイパスの喫茶店に待機している。

「出来るだけ早く」「バイクで向かう」で電話は切れた。化粧も直さず、服装だけをバイク用に替えた。ジャージのチャックを首上までかませながら、鏡の前でアキコは自問した。「連絡を待っていた誘惑者は、ホトトギスを家来に遣えるだけ人生の経験を積んだ誰かの筈だった」鏡の自分に、夢で口走ったその名を告げようと、口先まで出しかけたが止めた。「その誰さんはお休みね、けれどなぜか樋田くんが会いたいとは」市を東西に縦貫するバイパス。行程は高速の出口から一方の端まで十二キロ、それほど長くは伸びてない。す速く走ればそれだけ早く抜けられる、車の列は途切れ見せず渋滞知らずに行き交う。車道の両側には小綺麗な店が軒を並べる。中間点にコーヒー店が建設された。緑と黒の丸い大きな看板がひときわ人目を引く。土曜日の夕方、引ききらずの客足に広大な駐車場も車で満杯の盛況である。片隅に駐輪コーナーがあるが、自転車は一輪も置かれていない。バイパスの路側帯を車にも負けないスピードでスポーツ自転車疾走してきた。喫茶店看板の下にかかると、レバーを軽くひいて減速し歩行道に乗りこみ、一漕ぎでぬけると車止めを器用にくねり避けて駐輪コーナーに止めた。身のこなしも軽くひらりとサドルを降りたのは女である。上は上半身をぴっちり包むカモのジャージ、下は腰と腿にはゆったりゆとりを残し、ふくらはぎから下が細身に絞られる紺のジョッキーパーンツ。剥き出しのチェーンとの接触を防ぐのがくるぶし深絞りである。バイクを冊に立てると、ヘルメットは取らず夜光用の橙色のゴーグルも装着したままに周囲を見回す。入り口を確かめ、車の進入の途絶えた隙間に急ぎ足で入り口を目指した。店内ではヘルメットこそ外したが、ゴーグルはそのままにしているから顔の上半分を隠している。カウンター前まで進む、踵を下ろす度に靴底の金具が床を打つ、その打音が固くフロアに響いた。彼女は高速走行を維持していたので息は乱れ、胸がふくれ肩がゆすれるのも隠さない。女が振り向いた。アイギアを外した、天井からのダウンライトに汗の流れる顔が浮かび上がった。アキコだ。ジャージにヘルメット、その服装は店内でひととき目立った。窓際の二人席に座る翔に気付いてアキコが手を振ると樋田は立ち上がって応えた。男達の羨ましげな視線が翔に向かった。「こんな状況、どう対応すれば共に傷つかないか。助けてもらいたくて」樋田は実名を上げずにこれまでの交際を簡単に説明した。そ

の少女から交際のあり方を変えたいと迫られていると  
「樋田くん、なれそめなどは分かった。私と知り合う前からのお付  
き合いなのね。それだけを聞いて助言しても年上のしたり顔するだ  
けで、的はずれになってしまおう」

アキコには彼のある言い回しが気になった。  
つきあいが数年に渡る、それならば住む場所も気心も互いに知っ  
ているはず、「翔をもっと知りたい」と聞きなれないその言い分とは  
何を示唆するのか。それにしても生々しい響きとの疑問を解きほぐ  
そうと、頭のなか整理しているとその真の、生々しい意味に気づき、  
少女の思いの深さにアキコは鳥肌が立った。知りたいと求めるのは  
肉体の密着なのだ。

娘の一途さに背筋が騒いだのだ。翔はしかし、裏に潜む含意には  
気付かぬままアキコを呼び出し、隠された熱情の真意を思いあぐね  
て、ただ状況を仄めかし助言を得たかったのだ。  
そして翔がまだ説明していない裏面に思い当たった。その少女と  
は誰かを見当をつけたのだ。あの時電話を取った少女、冷淡、敵意  
まで聞こえる言い回しで口を開いた少女、そしてふと「父は留守」  
と漏らした間柄の娘。  
翔に迫っているのはイトコに違いないと。女の勘といえる。しか  
しアキコはさらに探る。

「樋田くん、来週の金曜日に連絡するのね。週末に逢うと約束して  
いるのね」

「彼女は家に来てほしいと誘っている」

「源治さん宅」でしようと言いかけてやめた。特定していると翔に  
知られないのが良い。

その逢瀬を応援するのか妨害するか、忠告いれるか見過ごすか、  
ともかく何らかを決めなければ。

「一つだけ教えて、上の姓は必要がない、彼女の下の名前だけを知  
りたい。もう一つ教えて、彼女はどんな人なの。彼女の顔つき、髪  
型、姿。それともう一つ教えて、彼女の歩き話し方、立ち振るまい、  
歩く姿勢何でも良いわ、それらを教えて。助言するのに必要なの」  
一つが二つと三つになり、全て教えてにまで発達した。樋田は目を  
閉じて、  
「名はサキ」  
アキコは「コグレサキ」と姓と名を心にしっかりと刻んだ。

「黒い長い髪、肩に垂らし顔は白く……」そして一言も漏らすまいと  
聞き入るアキコ。

周囲には客のひそひそ話すと、店員がフロアーを歩く踏み音がコ



ツコツと立った。壁は白く高く、天井近くに高窓が大きく開けられていた。夕焼けの照り返しが窓の開口からこぼれ、白壁、白枠、白天井が茜色の霞の漂いに染まった。

アキコは高窓を見上げていた。夕日は西に落ちるばかりで、茜色はさらに濃く、黒紫に近い照りを壁に落としている。霞が天井に漂い始めた。それは高窓の水準から少しずつ降りて、目が眺めている辺りにまで達した。ホールが紫の霞に覆われ始めた。

隣席のひそひそ呟きも床の足音も、アキコの回りが霞に包まれていくから、もうコツとも聞こえなくなった。

聞こえるのは翔の独白だけ。唇先はアキコ耳元に触れるばかりに近寄って、声こそ小さいが耳奥をくすぐる低い声でサキを語った。

アキコは思わず身を固くした。

「素直に伸びる髪、肩の高さを越える。瞳は黒い、肌は透明に抜けるほど白い、かすれる声は聞いていても滑らかだ」

耳の奥で聞けと声放つ翔、その声は外耳を跳ねて内耳に突き進む、はねる度に拡大されてアキコの脳内にこだました。中空の紫霞が色濃く漂う辺りを、口を開けたまま見上げるアキコ。

白い女が天から降りてきた。それは等身大のサキ、生けるサキの後ろ裸の幻想である。サキの後ろ姿をアキコは追った。

幻想を追いながら、目をうつろに漂わせるアキコを、翔はなおも許さず耳元からサキの映像を吹き入れた。「表情はいつも不機嫌、しかし私にだけは白い歯を見せる。声はかすれ、ただ声を聞く人には疲れ女の悪印象を響かせる。しかし私にはいつも滑らかな声で花の色を語る。」

まっすぐな髪は肩を越すと海原のように波打って、波の乱れた様子を肩にはらって見せつける。黒い瞳が放つ光は深海の珊瑚の青の瞬き。肌は白く時には桃色で深紅にも染まる」

翔の描写は屈折し跳躍し、形容しながらその意味の背反をあからさまに見せた。翔の説明、比喩にアキコは反発して、追従できない。幻視のサキは、アキコの反発に迷い、身体の形状、髪の色を形成できず、霧の奥に溶けて消えた。

去った姿を宙に追い、なおも確認しようとアキコは目を凝らした。耳元を責める翔の囁きが続いた。アキコは「もうその少女は存在しない」と翔の口元を振り払った。

すると幻影が霞の奥から戻ってきた。裸の姿は別人に替わっていた。

白さが透明に抜ける肌色ではない、薄黄のにごしが肌の表に浅く張る、自然にカールする褐色の短い髪、そして細身の少女では全くなかった。成熟した女体、腰回りも下腹部の盛り上がりもふくよかに発達した女体が空中に漂った。見上げるアキコに新しい幻影が囁

いた。  
 「誘惑するのはサキではない、あなたよ、あなたとはアキコ、それは私よ。身体で翔を誘惑する。それが今、明日では翔は消えてしま  
 う。  
 アキコ、お前の季節が今、来週でも来月でも遅い。翔を誘惑する  
 のよ」  
 中空の幻影に座るアキコが答えた。  
 「絶対にダメ、一人で待つ少女を翔が訪れるのはダメ。誘いは罠よ、少女に捉えられるのは翔よ。誘いに乗ってはダメ」  
 翔からの相談とアキコの助言、それが会う目的だった。二人の会  
 話少しも助言に結びつかず、アキコの空を裂く叫びで終わった。  
 バイパス、夜の幕が夕暮れを閉じた。今も流れは速く車は多い。  
 無言でバイクを押しながらアキコは翔と並び歩いた。  
 進むにつれて緩い登りにさしかかる。前方には長いスパンのアー  
 チ構造の橋がせり上っている。歩道の脇には胸の高さを超す欄干が  
 並ぶ。この地にくれば多摩川の流れは中流から下流に入り川幅は拡  
 がる。水量豊かな朝川をあふれうける合流点は、すぐの上流に位置  
 する。  
 土手を越え運動川原を渡り、本流に影おとすアーチの斜橋。橋を  
 支える支柱は一本、夜空に高く伸びている。  
 登りをつめて道は平坦に落ち着いた。そこが川の流れの真上にあ  
 たる。川面にそよと吹く風でも、橋の上では勢いが強い、アキコと  
 翔の狭い隙間をビューーとうなり音を残しぬけた。風の勢い強くて身  
 体には寒いほどだ。  
 巨大な柱の構造の陰で二人は止まった。  
 前方、対岸に浮かぶ白い建物を眺めていた。倉庫であろう、四角  
 張った造りの幾棟かが並んでいる。壁には窓も無くのっぺりするだ  
 け、垂れ幕案内は掛からずペンキ広告も描かれていない。下から青  
 い照明を受けて、壁の白さが夜の空間に際だっていた。  
 昼に橋の下、川の流れを見渡せば、川と川原が見えるだろう。瓦  
 礫と芦の荒れ広がる川原、蕩々と流れるのは多摩のせせらぎ、それ  
 らは目にも親しい川原光景である。  
 今は夜、灯る明かり一つと見えない川原を見下ろせば、暗い地溝  
 がひろがるだけだ。夜は何も見えない川原に騙される。川原がうそ  
 ぶいた、もはや川でない。夜景の川原は外洋に臨む港だった。そ  
 みおろすは夜の地溝それは内港、アーチ橋の歩道は見晴らす丘の  
 公園で、川筋は港に入る滯筋。下流は目下から遠く見えない果てま  
 で伸びているが、それは遠い海原に続く。  
 岸壁は土手、船が幾隻も並び夜の潮干に碇を下ろしている。

二人は川原が港との錯覚に同時に取り憑かれた。「ビルが海に浮かんで見える」とアキコは呟いた。

翔は静かに白い倉庫に囲まれる港の夜を眺めていた。

アキコはバイクのサドルに半腰を乗せ翔に向き合った。

喫茶店での話し合い、アキコの口調が翔を諭す優しさから、突然空間を裂くきつい言い回しに変わった。年上の余裕はすっかり消えたけれど、アキコはより翔に近づいた。

夜の内港を見ている二人は、言葉交わさずに沈黙を続ける。翔が引き返すべき地点はこの場である。橋の中央が別れの境で、右岸に住む樋田は橋を越えずに戻る。アキコはその中間点を越えた。バイクに乗ってマンションに戻るのが帰り道である。

バイクを引くアキコが橋の境を今越えた。

越え様に振り向いたアキコが口を大きく開いた。翔に語りかけた。数十台の車が列をなして通った時だったから、翔には何も聞こえなかった。しかし開いた口の形状からアキコが何を伝えたかを彼は聞こえた。「対岸に私が乗る船が待つ、あの船に乗って遠くに旅する」と。

すぐに樋田はアキコに駆け寄って、二人の境を越えてアキコを後ろから抱いた。「船に乗らないで、遠くに行かないで」と。

「船が待つ！」などは翔の聞き違いかも知れない。アキコは振り向きさえしなかったかもしれない。しかしアキコをこの橋の境で引き留める意志が翔にはあった。もしこのまま、港から空想の宇宙に消えてしまったら、残り香があったとしてもアキコの立ち去りには堪えきれない。

翔は駆け寄りアキコの後ろ姿を抱きしめた。

アキコは背を抱く翔を許し強い力に酔えば、すっかり後ろ身を彼に預けた。

「アキコ、愛している」

「熱い、お前の手」

アキコは「ダメ」と小さく拒絶したが、その声も車の騒音にかき消された。

樋田はアキコの背と腰をさらにたぐり寄せた。引き寄せられたアキコは宙に舞う人形のようにその身から力が抜けた。首をのぞけて振り返り見あげるアキコに、樋田が覆い被さる。いとも容易に樋田にアキコの唇が奪われた。

口吻をそのままに抱き合う姿勢を保った。二人で一体、あたかも一人の影が橋の陰に立つかと思えた。二人で一体、あたかも

西風が吹き二人は身体を離れた。甘美さはまだ身体に残る、通行者はいなかったから歩道からは目撃されなかった。しかし、通

橋上を走る車列から一台の車が路側帯に抜け出た。抱き合う二人の姿を見逃さず橋上に急停止した。二人からはかなり前方にまで進んでしまった。すぐに助手席の窓が下ろされた。女が窓からのりだした。架柱が視界を邪魔していたので、誰かは確かめにくい。「柱が邪魔、やっとな見えてくるくらい。やはり樋田と島田だわ。いい気持ちで抱き合っている」運転席に大声あげた。運転の男は樋田も島田も知らないから、面倒くさげに「もうでるぞ」と生返事した。「だめだよ、現場を見つけたんだから。それにここは遠すぎる、もっとバックして」

「橋の上でバックするわけにはいかないんだ。路肩の停車だって長居はまずい、白バイに切符切られる」

「何よ、意気地なしだね。白バイがどうしたんだい。切符を切られる前に逃げればいい」

「ピ―ポ―って言う前にか、出来るわけね―だろう」

女は携帯を取り出してレンズを二人に向けた。遠すぎる。もう少しと運転者をせき立てた。

「怪しい格好だ、キッスしてる」

「誰がキッスしたって良いじゃないか」

遠い距離だったから路肩に降りて、さらに数枚の写真をとって、運転者にはもっとバックと責めるが、彼は動かない。

「意気地がないんだ」車に戻った直子えらく不機嫌だった。写真デ―タを閲覧しながら「一枚くらいは使える」で機嫌が戻った。写真デ―キコ達を見つけたのはジーンテック庶務の山田直子である。

桜の宴では樋田の足下に席を取り、ライダー服のアキコに敵意をもち、車座に入ってと強要した。花見宴の悶着以来、樋田とアキコの動きを密かに窺っていた。庶務と人事は隣り合わせ、直子はアキコの出でこない。長い時間をかける打ち合わせには狭いブースなど使わない筈なのに。

二人が仕事を越えて親密すぎるのでは、その時から直子は疑いはじめた。そして偶然の目撃、橋の上、欄干の裏、支柱の陰で抱き合っていた二人。

「島田が樋田を誘ったのよ、いけ好かない女。それにしたって樋田がああの上に手を」直子にはアキコへの恨みにもまして、年かさを願みない奔放な行動に報復したいと憤りが蓄積した。

翌週  
橋の上での突発事は二人にはある意味で折り返し点であった。

あれほど濃厚な接触を体験したあとでは、女と男はそれまでのさ  
らりとした、水のつきあいには戻れない。ではどのような付き合い  
形態が二人に正しいのか。距離の取り方に悩み、あり方にもがき、  
しかしあるべき形に収斂させなければ交流は続けられない。

「来週の仕事日、金曜の午後まではそれを考えるためにあてる」、ア  
キコはそのように決意した。

月曜の朝、翔に通路で出会ったがアキコは声をかけず、軽く顔を  
会釈でおとし、そのままですれ違って素知らぬ顔を決め込んだ。無  
視で冷たい一週が始まった。

仕事中にはアキコは一人ブースに籠もりきりで、隣席の樋田には  
声すらかけない。ブースの内側で机に向かい「あの事は一週で終わり」  
と語り、ピーシースクリーンには「かすり傷の事故、もう忘れたで  
しょう」と問いかけた。

もう忘れたと努めるが意識すればなお忘れられない。自問を繰り返  
返し、かえって思い出しては反発する。樋田なんて若造と否定する  
葛藤に悩まされた。

夕方に離席する間に樋田には小さく「お先」と一声をかけるの  
み。突発事の後遺を表向きに、よそよそしさを守る表情には見せて  
いない。

先週とはうって変わって変わってつれないアキコに樋田は途惑う。一方樋  
田にしても彼なりに「あれは腕が勝手に回った」だけ、狂おしく抱  
擁したのではないと思えば直そう努めた。

しかし胸をアキコの背にあわせた時に感じた心臓のときめき、唇  
を求めてアキコに覆った瞬間の熱い思いはどうしても否定できない。  
思い出すたびに「かえって心がうずき、息苦しさを覚える」。

「私はそれがあった、でも彼女には、あの時、やるせない気持ちは  
なかったのか」

毅然とするアキコに焦った。

仕事中アキコが翔に親密な表情を露わにしなかったのは、会社空  
間では当然である。行為はとて私的な行動なので、二人だけの秘  
密である。愛情にしろ憎悪にしても、好悪の感情を表面に出すべき  
ではないとは仕事の基本である。

樋田もその常識は持ち合わせる。他人に勘ぐられてしまうほどの、  
あからさまな表出をアキコに期待したのではない。顔を見合わせた  
一瞬の微笑みや唇の動き、ほんのわずかな変化でも、二人にだけそ  
の裏の意味が伝わる動き、その微かな表徴を樋田は待った。

わずかな変化でもその裏にわずかさかさを込めて何かを伝えるのは、

見られたら心をさらけ出すと同じだ。わずかが実は危険、他人は見ている。アキコがどんな変化も露わにしないのは、心の内を翔にも隠しているのも、保身とは別の時限での身の保ち方である。プロトコルの変様を見極めているのだ。五年の歳の逆の差がここにあった。

アキコの仕事ぶりに変化があった。

それまでは現部門に向くことなど滅多になかった。この週に限っては幾度も席を離れ部署に向いて、打ち合わせに時間をさいた。席を一旦離れれば滞在は長く、自席を暖める時間はさらに短くなった。はた目にはアキコも樋田も仕事に集中していると見えた。しばらくは無接触に徹するとのアキコの作戦、そして翔は時間差こそ置いたが、アキコ流の暗黙を理解して同意した。偽装する二人であった。

「週末には結果がでる」

一週間を波風なしとして、隣り合わせの席でも無関心を装い、週の五日をなんとか凌げば週末がやってくる。週末に何かが起こると樋田とアキコは予感していた。冷淡に変容したつきあいの様は、ただ週末を待つ偽装、偽装は誰にも気付かれなかった。誰にも」とした

が、アキコと翔は密かに監視されていた。庶務課の山田直子である。橋の上の接吻を目撃し「今週はきっと頻繁に接触するはず」と二人のブースに執拗な視線を向けていた。しかしアキコが立ち上がったのも隣の樋田には寄らず、別フロアの部署に向かう。廊下ですれ違っても隣の樋田には視線を向けたが、袖触れるその瞬間にも見交わす目は冷淡、ただ行き違っただけ。アキコにはどんな小さな表情の変化も、目の笑いも見つけられなかった。

直子は「橋の上の二人は別人だったのか」と諦めかけたが、一転した冷淡振りは先週に親密だった二人と大違いなのに奇異を感じた。「それがおかしい、はた目を気にしてあえて言葉を交わさない示し合わせた演技よ、きっとそのうち尻尾を見せる」密かな監視を翌日も続けた。

一日二日が過ぎ、木曜も無事に終わって金曜を迎えた。金曜の明日が土曜とは暦の法則である。

週の四日が大忙しだったアキコは、それでも金曜となったから明日が土曜とはっと気づいた。約束の日は土曜、明日がその日と思いついた。

藤村には社長室側の予約ミスとアキコは説明したが、これは小さ

な嘘である。アキコはミスをした。

余裕をもつて一週前に会議室に予約を入れた。南に窓が開くその会議室は、太陽の暖かさが温和に差し込むから、喧嘩腰の討論でも和みの結論に達すると人気がある。

予約が通って安心したら社長秘書の咲子から電話が入った。

「その時間を譲って。あの会議室を確保しろとお上が大変」  
お上とは社長。予約システムの解禁時刻からは二時間だけ過ぎていた。咲子に譲って予約をすぐに別室に入れ替えれば、代替は確保できた。イントラネットのページを一枚めくり探す手間だけ。条件は異なるが別部屋の予約を確定するアキコの指クリックがなぜか止まって頁が閉じた。

そのまま四日放り出して今日は金曜、朝も遅くなつて探したが、会議室には全てに予約が入っている。藤村への小さな嘘は「咲子が今日の朝になつて頼みにきたので代替の確保が」との説明にある。社長にたびたびある横車、彼が相手では無理押しでも、藤村にはいかんとも仕方ないと諦めた。  
「松木の事務所はとれるのか」  
会議の場が松木事務所に変更になつた経緯である。

「松木さんの事務所では会議ができるそうです、予定があつて開始時間が一時間だけ遅らせてとの条件がつきますが」

「遅れるのはいたしかたない。外注先に出向くというのは気になるが仕方がない。持ち出す書類が重要な情報だけに、喫茶店で軽く打ち合わせでは危険だ。しっかりと綴じあわせて、外に忘れないように管理してくれ」

部長の応諾を受けてアキコは電話口に戻った。  
「三人で向かう事になります」

午後、出発時間となつた。アキコが出向くと伝えた三人の筆頭の藤村が「儂は行かない」とゴネ出した。

理由は「一度に三人も部署から抜けたらまずい」である。別の理由があつてそちらが本音である。それは「儂ほどの管理職がこのこと外注先に足を向けたくない」こちらも至極もつともだ。

藤村の急変は変更する時点でアキコ、織り込んでいたので驚きはしない。アキコの気まぐれで会議が外部に移り、結果は藤村を除外した。ここまで裏工作も含めて用意は万端。

「松木コンサルタントの説明を聞いて、最終的にどう評価したらいいのですか」

「要点だけをキミが来週にもまとめてくれればいい。クリティカルな部分にハイライトを当ててくれ。そのうえで儂が最終的に判断す

る」

三人と伝えて一人が抜けて二人、その二人目は樋田で彼は旅行鞆を抱えている。外出するその足で出張に流れるためである。東京駅に七時の予約が立てられている。インタインの身分で泊まりの出張とは珍しいが、一昨日の水曜日に急遽決まった。

関西事務所の定例の打ち合わせには人事が陪席する。マネージャからの強い希望で採用の主任者、すなわちアキコが選定された。水曜になってアキコは藤村に泣きついた。

「金曜までに三本のレポートを出さないと」出張する余裕はない。レポートは藤村が役員会議に必須なので、他の部員を出張させると決まった。しかし時間に余裕があるのは樋田だけ、インタイン見習いとながら採用ではアキコの代替は可能との評価が立ち始めている。その樋田に関西出張が命じられた。

出張者の変更もアキコの裏工作と理解すれば辻褄があう。樋田を出張に追い立てた事になるが、それは「彼の行動の管理、土曜と日曜の行動を手取るようにしておく」ための画策ともとれる。

樋田はアキコのブースに入り込める口実ができた。会議は何時までの予定ですか」

突然入った樋田、アキコは目を丸くして彼を見上げた。

アキコから、彼に懐かしい匂いが立ちあがった。匂いとはアキコが愛用する化粧の香りに、本人の体臭がかすかに混じりあい、その場合に隠された刺激的な調和といえる。

胸や脇、腹、下腹から、それらの肌、秘めた部位からの沸き立ちが、化粧の香にさわやかに重なり、柔和されたアキコだけの匂いを樋田はしっかりと感じた。

初めての接触で嗅いだお尻の臭いも、橋の上での接吻で湧き上がった唇、喉の臭いもこの沸き立ちと同じと気付いて、下半身にとある主張を促す「張り」が出現した。アキコ目の前に立つままなので、その打ち消しに若さにもめげず努力した。

「開始が四時半なので六時を過ぎると思うわ」

「六時には中座します」

「翔くん、今夜中に大阪に着きさえすればいいのでしよう。九時半まで新幹線がある、松木事務所からなら八時過ぎても乗れるわ」

「九時前にホテルに着きたいのですよ。翌朝の会議の準備をしておかないと」

アキコが藤村から呼ばれた。

「六時に打合せを終了して七時には社に戻ってくれ。僕はその時刻



には席に着いているはずだから、まず一報してくれ」

「了解です、私もバイクを置いてあるので社に戻らないと」

軽く答えたが、本音は「今日の夕方に戻るのには鬱陶しい。なんとか帰社から逃れたい」である。バイクを置いているが、今日に限って街乗り用のチャリで通勤したから、週末に駐輪場に放置しても盗まれない。

出発時間が迫った。会議の支度整い鞆に書類詰めて二人は飛び出した。

ジーンテック社の出張手順では、必要経費を出発前に前借りして後日精算する。日程と経費見積もりを票にして樋田は昨日、木曜日の午後、庶務の担当者山田直子にアドバンス、前借りを請求した。研修生の樋田から出張費の請求に直子は驚いた。

「主任が時間的にやりくりできないのでその替わりに」樋田からの注釈、直子はなお疑う。

「主任さんの替わりですって、じゃあ彼女が計画を立てたの」

答えは「主任がすべてを決めた」で、彼が選ばれた事情も説明した。

「樋田さん、宿は一泊だけなの、せっかくの週末だから土曜の夜もお泊まりなの」

「会議は昼食をはさんで二時すぎには終わるので、土曜に帰ります」

「島田主任が後から、あなたと合流してもう一泊するかと思っただわ」

直子が皮肉をこめて口にした内容を、樋田は理解に苦しんだ。週末に後から合流するとは仄めかしにしては意味が深長である。それほどこの事を軽く口にはさむ直子の裏の意味は理解出来なかった。

目的も請求額も妥当、前借りは請求通りに支給された。

しかし直子は釈然としない。アキコが画策しているからにはこの出張には裏がある。樋田翔の出張はあてがまで、本当は二人の週末旅行。そして仄めかしを入れたら、樋田が目をはちくりした。「彼だつて主任の狙いの裏を知らないからあんな純朴な反応を見せた」のよ。

直子は「追っかけが無ければ。帰ってから逢い引き、橋の上か」とも疑う。

松木事務所に向かう二人、外部会議に臨む当たり前の何もない出立だった。誰からも注目などされていない、直子を除いて。飛び出す二人が、解き放たれたかに見つめ合って同時に笑顔を浮かべた。その笑顔を直子は見逃さなかった。「やはり怪しい」

一週間、見張っていたが、これまではそれらしき兆候を見せなかった。最後の最後で、二人だけに通じるうち解けた表情の掛け合い、やっとそれを目撃できた。

携帯で撮影した画像を印刷するためにピーシーに転送した。

人事コンサルタント、松木は四十五歳を迎えた。

転職を二度経験している。最初の就職は学生時代にアルバイトを経験した縁で入社を決めたが、品質事故が多発し売り上げが低迷、社業不振に陥った。退職金が出なくなる前にと三年目にして同業種に転職した。企画部門に配属されたが上司と対立して、居心地は良くない。我慢もこれで限界と思いつつ五年目に退職した。

三社目は事業分野こそ異なるが、人間関係が穏やかで仕事環境にもなじめた。十年を総務人事の部門で広範囲に任された。採用の技能を一気に深化させた。

親睦スポーツ大会で転倒、鎖骨を折り二ヶ月の休暇をとった。戻った日に会社が管理職リストラを公表した。要項を読み下しながら松木は二重の混乱を覚えた。もし病欠をとらなければ彼がその計画を詰めたはずだ。それが混乱の第一。第二の混乱は松木が明確にリストラ対象にあげられている点である。対象管理職の条項を読めば、彼を個人的に狙っているかと理解できた。

二ヶ月の空席で彼の立場は悪化し、会社も彼には冷淡に変わった。責任の範囲を広く取り、いずれの分野でも専門を深化させた。別の言葉に言い換えれば「やりすぎ」で反発を食らった。

退職条件を聞き出すと「一人で普通に生活して一―二年は食っていける」額だった。

会社からの指名がでる前に応募をきめた。それが四年前だった、四十一歳。肉体的には若いけれど、再就職では微妙な年齢である。企業の多くは中途採用では三十代の経験者を求める。

これまでの経歴と縁を切つて、新しい職種に飛び込めば、先が開けるかも知れない、松木は独り身の気楽さからコンサルタント独立を狙った。それを計算に入れ、あと押しにもなったのは「一人で食う生活」だった。

扶養に縛られては冒険にとびこめない。妻、元子と別居生活が三年と固定している。よりを戻す意志は松木にはないし、元子としても松木が失職して無収入の境遇と知れば、なおさら遠ざかるから、一人で食べばそれですむ、居直りで新しい仕事を切り開いた。

元子の父高橋肇が中野の土地家屋を突然売却して「中央アルプス村」に移住した。

雪山の並びを望む寒村が幾つか集合して、寝起きの悪い名前に化粧直して手頃な別荘地として、ソバも枯れる荒れ地を開発した。肇は朝の新聞チラシにその名を目にとめ、即物性を気に入ったのだ。う、その日に現地に赴き。売れ残りで地区外れの石ころだらけに案

内され、その場で移住を決意した。長年のやもめ暮らし、隙間だらけの古家の不快さを嘆いていたから、土地と屋敷の売却にはなんの躊躇がなかった。移住が終わってすぐ、七半世紀を越える悪習慣のタバコで、環状脈にタール塊が転がりかまらまる心不全に襲われ、緊急に手術して退院にこぎつけたものの、家の「アルプスの居間」で寝たきりになった。タール塊は頭蓋内にも猛威をふるい痴ほうが表出した。頭の血の巡りが悪くなったのである。

あれがアルプスと指さされた茶色の枯れ谷を、窓から眺めて涙する生活に果てた。元子は「介護と家事手伝いは一人娘だから当然」として実家に戻った。

以来、松木のマンションには一度も帰らない。松木にとっても一人住まいのこの三年の生活は心地よく、妻無しの気楽さを満喫していた。互いに不便なしの別居が続くのなら、求め合う心の渇きも身体は飢えもないし、同居に戻る希求など少しも感じていない。

アキコの目にあからさまにした松木の裸の薬指は真実だった。離婚に判をと迫る松木に「そのうちに」と返事するが、曖昧な言い回しの裏に夫は鬱陶しいと避け、会っても気障りだから、離婚は規定のまま、そのうちと片づけていくだけである。

コンサルタントとして独立する目標を松木は立てた。総務の経験は積み上げているが、能力で食っていきける仕組みはこの世の中にはない。起業までの充電期間に半年と覚悟を決め、民法、労働法などを読み戻し、勘所を頭に入れながら、都心にオフィスを置くコンサルティング企業になんとか潜り込んだ。

当初は総務全般の開拓を進めたが、全般とは曖昧に尽きるだけで、そんな職種に企業は金を払わない。総務が金を払うのは人材紹介のみと決まっている。

需要とは何かを知ってからの変わり身は早く、人材紹介のベテランとして売り込んでいった。採用業務でいっぱしの仕事をこなした実績が評価された。顧客の確保に苦勞しながらも松木は、一つ二つと顧客企業を広げていった。収入と経費のやり繰りの四年が経過していくうちに安定してきた。

ある夜半、消し忘れたテレビの騒音に目覚めた。周り見渡すとそこはただ生きるだけの、なんとも殺風景なやもめ暮らしの雑空間が目に入った。「そろそろかな」と呟いた。

「ずいぶん昔に忘れた。けれどまだ思い返す。元子と別れても寂しくないのは、あの女を思い出すからだ。でも今から探してももう遅い、焼けぼっくいは拾わない。」

しかしすつかり過去を忘れるために家から逃げなければ  
自分に言い聞かせた。

学生の時にある年上の女性と親密に交際した。女が妊娠を告げた時松木は狼狽えた。ふと漏らした一言は「墮してくれ」、一言がその後

の人生の後悔始まりだった。郵便口から何かが落とし込まれた。立ち上がった確かめると、薄い封書が一片「実家に戻る、火遊びの女」とあった。靴音が角に走った。松木はとっさに外に出たが、後ろ姿も遠のく影も、路角には見えなかった。実家に戻る理由はやり直すため、腹の子は墮す、勝手に松木は推測した。

女の実家は農家でその大字名は聞いていた。その地がどこに位置するのかわからない。卒業と就業の忙しさに紛れてその地を探す手間を惜しんだ。

やっかい払いした女から遠ざかりたい気持ちがあつた、二十歳の春だった。

その後の人生で松木は十を越す女と知り合い、元子とは結婚生活には入った。しかし彼女に愛されたと感じる瞬間を一瞬も覚えていない。元子も同様に彼から愛されていらないとは自分の身体で知った

だろう。交接する身体の反応が互いに冷暗なのだ。失った愛を悔やみ、独り寝の寝室で女との愛の行為を思い出しては、松木はうなされた。

独立四年目、松木が仕掛けたのはジーンテック社総務部門長の藤村を紹介してもらった。

人事の工数削減を核にした取り込み作戦を仕掛け、狙い通りに進んだ。採用の外注化の引き継ぎ打合せまで進み、打ち合わせに主任の島田を呼ぶとなつて、女性主任とは想像すら巡らせず、待つとアキコが部屋に入ってきた。

初対面、顔つきと仕草を目の前にして息が止まった。一目で惹かれたのだ。

翌週の金曜日、さわやかな朝を松木は迎えた。

午後にはジーンテックと打ち合わせ、アキコに再び会える。

午前遅くに電話があつた。受話器を耳に押しつけて彼女を聞いた。

打ち合わせでなじんだかすれ声。言い始めがすこしよどみ、終わりの声が高まるのは湾を臨む山の手アクセントで、アキコは歌う調子で使いこなしている。

「今日の打ち合わせ、松木さんの事務所に変更できないでしようか」心はぜるはね上りを言い終わりに聞いて、松木は懐かしさを抑えられなかった。

会議室は彼だけが利用する。いつも開いているのだが、少々のはったりを付けて返した。別予定があつて三十分だけ後倒しと返事するとアキコは「それなら用心を取って一時間の遅く」で同意した。彼女も後倒しを望んでいたのだと松木は分かった。

一時間の遅れは二人の共同作戦であつた。

ポケットに携帯を戻し、松木は声も出さずに

「遅い午後、こみ入る内容。部長は下請けに外出などしなとも言つたな。若造の樋田は早々と外すと注釈してくれた。すると最後にアキコが残る。」

六時をかなり回る遅い時刻」

打ち合わせまで一時間を残す。

懸案となりそうな中身を確認していた。机に戻ると事務員同士のたわいない対話は続いていった。耳を閉じて資料に目を通した。頁をめくり文書に目を落としても、字面がただ並んでいるだけで集中できなかつた。

会議の準備などは別の要項に悩まされていた。眼に浮かぶアキコの姿態に妄想を重ねていたのだ。

「アキコも俺には気が乗っている、だからあの唇を嘗め、喉の肉を噛んで痛めつける。いや、それは全く違う。乱暴は駄目だ。四十代なのだから私は。優しく、だから強く抱くのだ」

入り口のドアが開き「社長は会議室で待っています」事務員の声が聞こえた。松木はおもむろに立ち、会議室のドアを開いた。目の前にアキコが立ち、鉢合わせにとどまった。部屋に入る寸前だったので、目と鼻が触れ合うほど近い間合いでの再会だった。

「あら」とアキコが驚いた。目が驚いたのだ。はち合わせの危うさ、思わずぶつかる二人の隙間の狭さに驚いた目の丸さだった。松木は硬直し、出会いの姿勢を保ったままでそれを変えようにも手足が動かなかつた。すると松木とドアの間を、半腰におとしてアキコがするりと抜けた。

席に座つてアキコと松木が会議卓をはさんで対面し、樋田は二人から離れた。彼は黙しているが松木を見ていた。その視線は振れもしないもので、松木には心地が悪く、間断なく彼の目に身体が鞭打た

れるかの痛さを感じた。それでもその視線に気付かない振りを通し、松木はアキコに語りかける。

「部長さんは後から参加しますか」

アキコは丁寧に、どうでもいい話も交えてたつぷり時間かけて部長が参加しない理由を説明した。これは時間稼ぎ。

やっと樋田は視線を松木から外した。「やはり関係ない」と己にだけ小さく呟いた。母奈津子の最期が「マツヨ」、目の前の紳士は「マツキギ」でその違いは小さくはないが、やはり違った。「初対面では似通いに驚いたが、他人の空似と片付けた。今一度見直したら空似にもなっていない。顔つきだけでなく、話しの声も私と全く違っていい。姓名が少しだけ徒に近かったから過剰反応を起こしてしまった」

樋田からの視線が途絶えたので松木も一息ついた。

松木のほうでは、その件にはもう一切推理を巡らさないと聞いているので、今日は会った時から樋田を無視している、言葉もかけない。

アキコが口切りした。

「始まりは四時半の予定だったけれど、もう四時四五分。でも終了の時間は予定通りにしないと。私は六時にはここを出なければ、樋田も六時に出発しないといけない」

「困ったな、それぞれの案件を納得いくまで説明すれば二時間は必要だな」

「二時間が最短には正しいけれど、一時間でやるだけやってみよう。無理を承知でストレッチかけて。こんな事って何度もあるのよ、特に我が社では」

ストレッチとは伸ばす努力すると訳す。ビジネスでは「実現できない目標をムリヤリ設定」となる。

「そうは言っても、部長さんも出ていない分……」

冒頭から悠長なやりとりが続く。樋田はやきもきしながら聞いている。松木は、

「資料のコピーが必要だったな、余分にとっておけば良かった」と反省するが、事務員を呼んでコピーをとらせる。待つ間に世間話もまた重なる。五時がまわった。

コピーが出そろってやっと始まった、樋田が時計を見るともう五時を十分も越していた。この悠長さは会議の終段で樋田を外すための松木の謀略で、アキコは荷担している訳ではないが、進行を急かせないのはほぼ共犯である。遅く終わるのも仕方ないと、資料を悠然とめくっては論点となる部分に赤ポールペンで下線を何行も引いた。

一通りの説明が松木からあって、わだかまりの部分がアキコから

質された。そしてやりとりが膠着した、討議する案件が無くなったのだ。時計をのぞくと六時十分前、  
 「もっと引き延ばさないと、何か些細な質問はないかな。十分以上を消費できる些細な質問」

松木は思いつかないが、アキコが引き延ばしに気づいた。  
 「松木さん、申し訳ないけれど、私このコピーに赤で手書きを入れてしまったの。このまま藤村に渡す訳にはいかない。もう一部、原本から綺麗なコピーをとってくださらない」

「困ったな、私の分も手書きが入っている。パソコンから打ち出します」

松木は事務室に立った。一通り議論は終わり、アキコはもはやコピーを待つだけとなった。しかしアキコは一向に帰社の準備に入らない、樋田はその悠長ぶりは気になったが、出発に迫られているので鞆の自身の整理し、上着を羽織り小道具、身支度を調えた。

松木が会議室を退出した、二人だけのわずかな合間だった。立ち上がってその手をアキコの肩に置いた。樋田のその手をアキコが頬に導き強く押さえた。何気ない接触到見えるが接触するのは掌と頬、濃厚な接触を触れあいのさりげなさが隠した。座るアキコに立つ樋田、見つめ合う目の絡み合いは、じゃれ合う男女の恥ずかしさをももし出した。目の混じり合いで恋人と互いが確認した。

没交渉で通過した五日儀礼の終焉は、恋人の確認だった。そして「明日は土曜」と二人で合図した。

松木が近づく足音で樋田は離れた。会議室に戻った松木は、樋田が立ちアキコが座る位置関係と、その場に横たわる沈黙を奇妙に感じたが、互いの気持ちを裏地に隠し織る間柄とは思いつかなかった。

樋田は若造、彼が男女の駆け引きなどこなせる歳ではないと松木は無視していた。樋田は鞆を肩にさげると「新幹線に間に合わない」勢いよく会議室をでた。

その後松木とアキコは確認、再確認、念のために予備のコピーをもう一冊など些末な話題で時間をつぶした。終了したのは六時三十分。

「打ち合わせの終了を部長に連絡する」と呼び出す、留守メッセージが返された。「予定を幾分過ぎたが松木の事務所をすでに離れた」旨の伝言を録音に預けた。

会議室から事務室に入ると、事務室の入り口にはカーテンが下ろされ施錠されていた。カーテンからは明るい外の光が漏れている。盛りの春なら夕暮れでも真昼におとらない街の明るさだ。人気の無い机だけの事務室に戻っていた。

外部とはカーテンと鍵で分離された密室、二人だけの空間に閉じこめられるとアキコは知った。気後れを感じない。松木と共にいる気持ちの高ぶりさえなぜか感じていた。閉じこめられた身の先行きには軽い興奮さえ覚えた。

松木は自身の机に座っている、アキコは対面する椅子を取った。「なぜ事務所には誰もいないの」不満に唇がめくれた。

「定時は六時、仕事にきている方は皆さんアルバイトの主婦です、小さな子達が母を待つから、定時になったらおしゃべりは終わりと大急ぎで帰宅します」

「人事は六時からが仕事なのよ」

「外注化すれば六時になったら帰れますよ」

発注元と外注業者との打合せ、仕事のスケジュールで起こりえない椿事が迫った。

携帯を取り出してメール文面を打ちいれるアキコ、彼女の肩と背を上目に狙う松木。近寄るすり足音は何の意味かと、アキコはこの状況を怖れるが、素知らぬ気配を通すので決して振り向かない。気持ちが高ぶるのを抑えられず、この場を離れようにも身の一つを立てず、速い心拍の乱れ打ちに胸は乱れた。息づかいのあえぎは打ち込む指先の震えに隠した。

二人の距離は、松木が手をのばしてアキコの胸を回せる近さとなつた。松木の息も荒く乱れた。女の項に息が撫でて吹きかかった。危ない近さ、その近さで松木は跪き両腕を伸ばした。アキコを背後から抱いた。

椅子に座るアキコは胴と腰をねじり、松木に振り返った。上半身だけを百八十度ひねったので、口を開けても「マツキさん何を」の一声が出ない。松木はさらに力をこめてアキコを抱いた。

息継げなくてもねじれにすがるとアキコは、そのあえぎの姿態に苦しさを固着した。ゆがんだアキコの顔に松木は「アキコ」ただけ囁いた。唇が触れるまでに二人が接近しているのは、息できなくてもねじれに身が辛くても、相手を二人が求めているためだ。

開いた目、切れこみが際だつ瞼、目付きは厳しくアキコは松木を斜めに睨んだ。ねじれに怒り、抵抗を力でねじ伏せられ、抱きすくめられだけに怒る女の目つきだった。

後ろを抱かれています。後背にはふくよかさがはち切れる。背と腰、くびれと丸尻。しかし女の格は前部に宿る。顔、口と唇、乳房と胸に。それらの総体がアキコの女である。しかし松木は尻と腰、そして背を抱きしめる。斜め後ろを見据える眼差しは、松木を「後ろだけ抱くの」と言いたげに、なおも松木をせき立てた。



「賭けるはお前の女の身の全てだ」そんな決意を声に出しても今のこのとき、とまどわせるだけ。松木は決意を唇の狼藉で伝えた。荒い項に唇を落とし、肩口から髪の毛の生え際にヌルリと這わした。荒い息に代わって熱い唇が執拗に項を這い舐め上げた。肩くねり首ひねるアキコはねじ曲げ体位のままに、唇の這いずりを強いられる屈辱に頬がふくれてきた。眉がゆがみ、眉間に皺が刻まれ、開花のように唇がぱっくり開いた。アキコの苦悶は松木には見えなかった。事務所空間に秘匿された。

アキコの全身に汗がどっと噴き、ブラウスに滲んだ。唇を喉口にうけ、喉をかみ切られるかと迷い、矯めた息をふり絞ってやっとの声を発した。

「これほどなぜ苦しめる」

松木は荒い息を止めても答えはでない。返事を求めないアキコの質問だったから、答えの用意も松木は持たなかった。ある変化が彼の本心、企みは熱いと知らせている。

男の身体が変態した。アキコは尻の丸みが固い突起に押し込められた。それは松木の外生殖器で、硬直しズボン前をもたげて突起した。松木はこの変化に腰を引く待避など取らなかった。四十男、恥ずかしさを顧みず、棒状をひたすらアキコの尻に押しつけた。アキコの尻の下部の膨らみの、まさに女の外生殖器の裏部位を、男の塊として松木が圧迫した。

女だからアキコはこの変化に驚きはしない。性愛につながる硬直を、とんがりの形でそのまま受けとめた。そして突起の押しこむまは尻が許さず、張りつめた尻肉が膨らみ突起に反発した。

アキコは嬉しかった。突然こんな風に抱きしめたのは、松木が徒心のいたずらでちよっかいを出したのではなく、好意を持っていたからで、「女の私を」を愛していると彼の身体反応で分かったからだ。苦しくともからめられても、松木に責められている実感は心地よく、硬直した男性器を、己の柔らかいお尻が感じるのはなおさら嬉しかった。

二人はその姿態を続けた。それは交合に限りなく近く、より甘美な接触だった。

不粋な風音が響いた。携帯がメール着信を告げ、アキコの手が小刻みに震えた。逃げるようにアキコは身を引いた。

仕事時間が戻った。スクリーンの着信メッセージを読むアキコは冷静を見せたが、指に力が入りすぎで不自然に押し続けた。

「樋田クンからよ、時間通りに乗り継ぎができた、特急に乗れた。予定通りですって」

松木はアキコの前にしゃがみ込んでいた、「あなたを駅まで送る」と一言だけ返した。

エンジンのだけが鈍く響く車内。押し黙る静けさが路なりに続くのは、先ほどの事態を話題にはしたくないとの暗黙の了解である。双方ともあの突発の変化を受け入れたとも言える。

沈黙を破ったのはアキコだった、ハンドルを握り前方を見ている松木の横顔に

「ホトトギスの夜鳴き、忍びの影がベランダ隙間を抜けた」

「何のことが分らない」

「チヨットしたおふざけ、遊び」

「ホトトギスのほう、それとも忍びの影」

「ホトトギスはお先棒、おふざけの影は寝室に忍んだ。松木さんのお遊びだったの」

「野暮ったかった。でも真剣さ」

「あの夜は責められたわ、さっきはあれだけね……」

謎めいた言葉は松木には理解できない。返事が続かず自然に沈黙に戻った。少しうるさいエンジン音を響かせて車は軽やかに車列を進む。特急駅までの道のりはバイパス、流れは順調で渋滞に巻き込まれない。流れに乗ってアキコを特急駅に送れば帰社時間の遅れは出ない。

残るは駅までもう三分とナビゲーションが伝える。ちらり画面を見た松木には、この三分とその間の対話がとても貴重で話しを継続すべきだと感づいたが、話し込む話題に思いつかない。

愛しい恋しいなど十代の言葉遊びを、この歳でただ繰り返すピエロにはなりたくない。

喜劇芝居を演じたすぐ後で、心に何も残らないだけの気のきいた話題とはなにか。松木に思い当るのは今のこの時空、空虚さだけだけ。

「こもったエンジン音がするだろう、ボディの設計は新しいのだけれど、六気筒という過激なエンジンを押し込んでいる。余分の二気筒が燃費を悪くしているし、ゴウゴウと唸りをまき散らしている。燃費とか居住性を良くしたいという努力は感じられない車。今時の燃費良い気の効いた車には負ける」

「松木さん、気の効かない車に私を乗せているのね。松木さんのなかで気が効かないのは他に何かしら」

「家来の夜鳴きホトトギス、忍び込んでおばれたベランダ影」

「さっきの電話」でアキコがやっとなぐりとした。

「あれは樋田からだ」

「電話で止まった真面目さ純情さの事よ」

アキコの小さな笑いだっただが覗かせた白い歯が、二人の間のわかまりを一分の会話で解かした。駅に到着するまでさらに二分の沈

黙が続くのだが、ハンドル握り前を見る松木と、前を見ながら横の松木に視線を流すアキコにはエンジン音唸る車内の無言の対話が暖かかった。

松木は真正面から言い寄る替わりに「少しだけ真剣な話がしたい。今日でないほうが良い。あまり時間を置かず、明日の夕方、食事をしながらでも。場所と時間はその時決める。しかし話の中身は出来上がっている」とだけ告白した。

駅に到着した。

松木は駅広場の入り口に停車したが、周囲は時ならぬ人だかりで雑然としていた。立ち止まり口論する者、しゃがみ込み携帯にかじりつく人、落ち着きなく広場を回り歩く集団、涙をながして空に祈る者も数人見かけられた。行動には一様性がない。

一旦は車外に降りたアキコがすぐに戻り、助手席に座った。

「人身事故による運行停止、下り線だけが動いてない。復旧の見通しはたてられないですって」

「いつになるのか分からないなら、ここに居てもしょうがない。社にも帰れない」

アキコは携帯で藤村にメールで連絡を取った。「特急駅まで来たけれど、事故で運休です。帰社時間は不明」と。

すぐに藤村から音声電話が返った。

「一通り事情を説明したのち、藤村は「樋田は近くにいるのか」と質した。樋田が乗るのは上り、上りは運行しているし、樋田はもう乗車している。その旨を説明した。すると「樋田と一緒に事務所を出たのか」と状況を執拗に求めた。いつもは報告を聞くだけの藤村だが、今日にかぎって詳細を求めた。特に樋田とアキコがいつに別れたかに質問が集中した。アキコは「樋田は会議が終わってすぐに事務所を飛び出して、私はコピーを待っていたので数分後に」など順を追って、脚色をまじえて話した。アキコが座るのは松木の車、横で松木が聞いているのを報告に入れなかったのは当然である。

「樋田は一人で出張するのか、主任も一緒か」

藤村のこの質問にはアキコは驚いた。アキコの代替として樋田が大阪出張は部長決裁で決定している。

「私は大阪には行きません」と答え、樋田を派遣する経緯をまた蒸し返した。藤村は納得しない口調で

「樋田とは別行動なのだな」と詰問の口調を崩さなかった。

いつもとは違ってアキコに詰問調の藤村を説明するに、時間を一時間ほど戻す。

アキコからの電話が入る前、打ち合わせから戻った藤村は机にこ

つそり置かれた封書に気づいた。社名とロゴのはいる社用の封筒で  
 あるから、社内の誰かからの通信であるが、差出人の記名はない。  
 宛先はくずれた女字で藤村様とあった。  
 開封すると一枚の書状と写真、書状には「人事部員同士の醜態、  
 昼日中、幹線の往来で、外聞など気にしないで抱き合っていました。  
 島田嬢と樋田氏の恥ずかしい写真をご覧あれ」とあった。  
 写真を見ると男女が抱き合っていた。薄暗いなか遠い距離からの  
 写真なので、藤村にはそれがアキコと樋田の組み合わせかと断定  
 できなかった。別人であるとも否定しきれない。そうだと言われた  
 ら、何となくそうかと納得はする。  
 席を離れる前にはその封筒は見あたらなかった、とすると空席の  
 三十分に置かれた封書だ。人事部員はアキコ、樋田、その他の皆も  
 出払っていたので外部からだ。人事部長などと役職を記入してない  
 のは、平素からそのように呼称する者からの可能性は高い。となれ  
 ば隣席の庶務、經理の誰かからか。該当しそうなのは女性だけでも  
 十名を超える  
 電話で藤村がアキコと樋田の今居る位置を執拗に尋ねたのは、二  
 人の抱擁接吻とされる写真を前にしているためである。  
 「この写真など無視すればいい、しかしアキコに反発する誰かがい  
 るという証明である。うかつに昇進させると、その者はより過激な  
 行動に踏み込むかも知れない」  
 写真が正しいのか捏造かは重要ではない、それが上長に配布され  
 たという事実が彼には気に掛かる。社内混乱を防ぐためには、なに  
 かと目立つアキコを昇格させてはまずい。写真に目を落としながら、  
 アキコを、と言うよりも自身の立場を守るための策を練り上げてい  
 た。  
 「樋田くんは上りなので今頃、東京駅です、私はホームから追い出  
 されて駅前広場にいます。アナウンスでは復旧には：」のあと  
 「タクシーを使えば帰れますが、待ちの列が長いので乗れるまで時  
 間がかかりそう：」  
 「タクシーを使って帰るほどの緊急性はない。復旧して八時までに  
 帰れるようだったら電話入れてくれ。八時には社を離れるから」  
 間が十分ほど車内で待機したが、駅アナウンスは復旧にさらに数時  
 間が必要と告げた。  
 「会社に戻るのも家に帰るも難しいわ」  
 「家まで送るよ」  
 車は広場を抜け街道を上った。ナビゲーターに住所を入れるため  
 路肩に止まった。アキコは町名と地番、それに部屋番号を伝えた。  
 その場所は川下に当たる小さな市で、ナビで探ると川の脇のマンシ

ヨンであつた。アキコは「一人で住む、同居の家族はいない」などの私生活も生活の表面分だけひろげた。「謎めいた話しを口にしたでしょう。深夜、ホトトギスがベランダに迷い込んできた。寝室にまで入ってきて、アキコ起きてと大騒ぎしたのよ」  
 「ベランダに鳥が迷い込む、戸口の隙間から部屋に侵入した、そんな出来事は幾度か聞いた。しかしホトトギスが日本語をしゃべるとは知らなかった」  
 「ホトトギスはお先棒で、実はある紳士が部屋に滑り込んできた。耳元で彼はしつこく愛を語ろうと誘った。その上私の身体に手を回して、私ははずいぶんと責められた。でも相手にはしなかつたわ。いつの間にか飛び去った。東に朝の気配が出始めたからよ。」  
 「それともあの紳士は夢だった」  
 「アキコさんを愛に誘ったのならそれは夢ではない」  
 松木は自信たっぷりに肯定した。軟体の紳士を自身に同定しているのだ。  
 「私ね、ホトトギスに言ったわ、あなたが連れてきたのは松木さんね、今は愛の時でないよ、これからだって愛を語りあう二人は無いと彼にしつかり知らせてあげて。したらホトトギスはベランダから飛んで逃げた」  
 「それだったらホトトギスは私の家来ではない、諦めがはずすぎるから、アキコさんを捕らえるにはもっと用意を周到に」  
 「松木さんは諦めないの」  
 「あなたが諦めても諦めない」

松木はマンション前まで送った、車からは降りずにアキコの後ろ姿を見送るが、背に声をかけてアキコを一旦引き留めた。「明日の夕この時間、この門前に車をつけます」  
 アキコは松木に戻って屈み込み運転席に座る松木の頬に唇を軽くあてた。事務所で押しつけた勃起性器へのお返しであった。  
 松木を車に残しアキコはマンションに跳ぶように消えた。

#### 四 黒バラの花束

駐車場にエンジン音の重い車が入った。しばらくして身だしなみのしつかりした中年男が入店した。初めて来店である、店内に幾分の戸惑いがうかがえる。入り口で一旦立ち止まり、飾られる花の種類、品数を目でなぞった。奥には間口一杯に恒温ウインドウがしつらえてあり、空きもなく花が飾られている。そこまで見て安心してドアを抜けた。

濃紺デューブネイヴィの地にページユの細いストライプ上着、八時を回るこの時間ならばノーネクタイ、シルクのシャツはペイズリ模様を襟と胸に覗かせる。サンドカーキのコットンパンツは明るく、バックスキンの短靴は褐色にくすむ。小さな会社のオ―ナーが週の仕事を終え、私服に着替えて外出。いまだ途中の往路の向かう先はなじみの食堂か愛人宅か、夜の風だつてこの男にぶつかれば浮つき気分が砕けて崩れる。男は店奥にまっすぐ向かった。

立ち上がりその男を正面から目にした瞬間、サキは背筋に鳥肌が粒立ち、ガクと膝が震えた。男の出現に恐怖を覚えたのだ。その理由にはすぐに気付いた、

宇宙のどこかで時間が反転したのだ。男は未来から抜き出て、花店に舞い降りたのだ。

一瞬にして別世界のどこかで二十年余が経過した。サキの目の前に二十年の経過だけ老けた「樋田翔」が現れたのだ。金曜には連絡を入れると約束した翔は、約束通りに来店して目の前に現れた。しかしそれはサキが知る翔ではなかった。二十年後の翔、四十代半ば、落ち着きある分だけ歳を経た。小金持ちのおしゃれに成りに果てた。未来の翔が今の翔にすり替わつて、二十年未来から抜け出てきたのだ。

男に直面するサキは、その二十年を相変わらず店の奥のレジに座り続け、成長も退歩も無かった。老けて陽気な翔と取り残され不機嫌のサキ。

北山台で発生した時間の不整合がサキと翔を分離してしまった。すぐにそれは誤解、時間の不整合など起こる筈がないと気を取り戻した。

確かに男は樋田に酷似している。しゃくれ気味の顎、素直に一筋通った鼻、もみあげの厚さ、そして目の鋭さ。目をそらした横顔が私は翔だと見せつけてまさに二十年後の生き写しだった。

「別人よ」言い聞かせたが、震えは残った。

店には種類に色と別れて様々な花が飾られている、床の花瓶に生けられる雑花には見向きもせず、ウインドウを男は見つめていた。内側にはバラが飾られていた。花弁の大きさと色とわかれ、色濃いう大輪から小さな淡いピンクばらまで、バラのみを飾っていた。求めるバラの種類を男は確認したのか、無言で真っ直ぐとサキに戻った。男は奇妙な注文をした。

「バラをまとめて大きなブーケを作ってください」

手先は震えたままサキはウインドウからバラを取り出し男に差し向けた。

「このようなバラですか。大きさ、色などご指定はありますか」

とっさにサキが選んだのはローズ色の中輪八重咲きだ。これがバラの売れ筋で花束のセットには必ず混ぜる。より大きく濃い紅色のバラ」

「サキはウインドウの奥を指さした。そこには男の希望通りの大輪で深紅のバラが淡色筋のバラの陰に隠れ並んでいた。しばし見とれ」

「あの色であるだけの数」と注文を入れた。

合五十本の大きな花束ができあがった。ピンクを混ぜて都合五十本の大きな花束ができた。サキは自身の判断で、ピンクを混ぜて都仕上がったその時、サキは今日始めての入荷品を思い出した。深紅を超えてなお濃い紅、黒とも見える「黒真珠、パールノワール」である。華やかさが取り柄のバラとは印象を全く異にするので、仕入れた源治も「売れるかな」と疑い、店頭には出していない。

黒バラがこの客に向くとはサキの「カン」だった、さっそく奥に入って梱包を解いた。この日の仕入れ数が二十枝、その全て二十体の裸を白レースのテーブルセンターにばさりと乗せた。男の目が光った。黒さに魅入られただ。

「この色だ、深紅を超した黒いバラだ、きっと喜んで貰える。お嬢さん、もっとありませんか、何本でも追加してくれないか」

「お客様、このバラは黒真珠と名付けられた、開発されたばかりの珍種で数多くは入荷出来ません。二十枝が今ある全てです。明日の一日かければさらに三十枝を揃えられます」

「明日では遅い、今夜にこそ黒の価値がある」と男は断った。

サキはピンク枝を引き抜いて、深紅と黒だけの五十枝で花束に取り組んだ。トゲを抜き下葉を払い、全て五十枝を一束に揃えたと抱えるにもサキの腕では辛い。大きな重い、豪華な花束が仕上がった。

黒真珠パールノワールを中央ではなく左に偏心した。数の不均衡を位置の乱れに乗せて、配置のアンバランスで黒バラ強調したのだ。

五十枝を固く束ねた花束は、みてくれ立派に仕上がったが、バラのブーケが本来かもし出す、浮き立つような華やかさはみじんも感じられなかった。深紅と黒と、色合いと濃淡で近い二色だけ、しかも互いに引きつけあうその配色を見ると、暗い驕りの側、黒バラに視線はおのずと偏る。

花束を贈るのは男で、贈られるのはいつも女。

金曜の夜にバラの花束を贈るのは、男のとある狙いを隠すためだ。サキが仕上げた花束の、二色の混じりに隠されたのは明るさでも華やかさでもない。深紅と黒をくすむ色調に閉じこめた、贈る男の意志を勘ぐるとそれは願い、企み、そして畏か。

この花束に託す男の願いが何かと具体的にはサキは知らない。とっさに黒バラを薦めたのは、夜の願いは黒いはずと見当つけて、深紅のみでは表現出来ないその願いを黒の色調に逃避させる狙いがあった。そして男は素直に受け入れた。

出来具合には男は大満足で、自身の胸にかき抱いてしばらく五十本のバラの妖しい香りにむせた。やかいな注文を追加した。

「明日ではなく今日、それもすぐに配達して欲しい。まして段ボールに籠もらせて、これらバラを窒息させるなどの狼藉なしで」

源治も出てきて明日の朝一番ではどうかの交渉が始まったが、今は今すぐでないとせっつかくの花束の価値が落ちると譲らない。

花商売の長い源治は男が花束を贈る手順は熟知している。

自身が運びその手で相手に贈る。この贈り方は正統と言える。しかし実は手渡しでなく間接の贈りはより効果的である。間接の贈りは相手に驚きを与えるのだ。

実の人間が目の前に現れるよりも、見えない送り主に募る想いは強くなるからとも言われる。

男は配送を使って今すぐにと譲らない。しかし本日の配送は終わっている。個別の配達源治の役だが、明日の早朝に出発の北行き旅行に備えるため、今にも家に帰りたいので首を縦に振らない。「自分で届ければ」とは言いたくても口に出さないのが商い流儀。

源治はとりあえず送り先の住所を聞いた。男は下流に位置する市を指定した。車を走らせれば十分の距離である。サキが、

「私が配送する」と源治を説得した。

サキ自身が選んだ色の組み合わせを男はえらく喜んだ。この花束は誰に贈られるのか、この男もそして贈り先の女の素性も知りたかった。それがサキの密かな関心で、自ら配達すると源治を抑えたのも花束の行方を突き詰めたかったからだ。

男のしたためる添え状を横から盗み見たが、その意味は分からないかった。

「空飛ぶバイクのライダー嬢へ、夜鳴きホトトギスより」。

贈り先の名にサキはさらに驚いた。それが島田明子。樋田翔の身元を確かめると電話してきたジーンテック社の人事部員の姓名はシマダアキコ。とっさにサキは、

「この花束の贈り先の明子さんとはあの電話の彼女に違いない。その人こそ、翔を誘惑している年上の女性に違いない」

男は贈り主を空白にした。「夜鳴きホトトギスで彼女は分かる」と書き入れようとはしなかった。それではサキは収まらない。「この客の正体も突き止めたい」は個人的企みであるが、それとは別に配達



する物品には依頼主は必須である。

「配達先からは必ず誰からの花束と尋ねられます。正しく答えないと戸を開けてくれません。配達し手渡す係として、夜鳴きホトトギスの代理では玄関を開けてくれるか心配です。」

そして留守で手渡せない場合もあります。贈り主様に連絡を入れて、後日配送の許可を：」

やんわりと記入を求めた。言い分はもつともで、意地を通す場合でもない。男は受け入れた。住所、名前を入れると、そこには松木義一と書かれた。再び拍動が高まった。はやる心を抑えて一拍おいて生唾を呑んでサキは尋ねた、

「マツキギイチ様からのお届けと伝えればよろしいですか」

「ヨシカズからと伝えてください、社会ではギイチと読み、生活ではヨシカズと呼ばれます。バラの花束は生活です。相手の方がギイチさんではないかと確認にきたら、ギイチと書きヨシカズと読みますと説明してください」

マツキヨシカズが正しい読み方だ。翔が漏らしたのはマツ・ヨ。近い姓名、そして時間の逆転崩れが起こったと怖れた男と翔の相似の相貌。

サキはぐくりと生唾を飲んだ。目の前の男は翔の実の父だと。

そして贈られる相手はギイチとの読み方にも馴染む「社会」での付き合いの女。仕事の仲間内に、つき合いの区切りとして「生活の花」をヨシカズとして贈る。彼女がジーンテックのシマダアキコ、翔の誘惑者に違いないと疑いを深めた。

配達バンの助手席に花束を置いてサキはアキコのマンションに急いだ。

「配達に行くだけではない、目的は二つある。」

金曜の夜に花に託す男の願いは愛情、それを私が探ってこの花束をこしらえた。相手はきつと彼の恋人、この推測が正しいか誤りか、島田明子さんを見れば判断できる。

しかし二番目はもっと大事よ、明子さんとはジーンテックのアキコさんだから、彼女をこの目で見るのよ。翔をどのように誘惑しているかと見るのよ」

パイパスの流れは順調、程なくしてマンション入り口に立つ。マンションのインターフォンで当該の部屋に繋がった。バラの花束の配達です、贈り主は夜鳴きホトトギス」と伝えた。

「まあ、お茶目な贈り主さん、松木さんからね。名前はヨシカズと書かれていませんか」

「ギイチと書かれています」

「マツキヨシカズさんでしょう。ギイチと書いてヨシカズと読むの

よ。部屋まで運んでくださらない」  
社会のつきあいからを外して、生活の交流に入り込んでいる間柄にサキは身震いした。

花束を抱え玄関前に立つサキ、配達者を確認するかのようによく用心深くチェーンを留めて扉が開かれた。その隙間からでは花束は通らない。配達者をなお確認してアキコはチェーンを外し、戸を開いた。贈られた花束の大きさに心奪われるアキコ。「なんて素敵、そして大きい」のつぶやきがサキに花束越しに聞こえた。

「大きいだけではありません。綺麗な花束です」

花束の背後から返答するサキをアキコは見えない。  
ここまでではアキコの声を聞くだけだった、声から類推するに彼女の年齢は二十代の後半、かつて電話口で推測した歳と同じと思った、であればやはりジーンテックの彼女である。

一方アキコは配達員の声に聞き覚えがあるとは感じたが、会話を交わしたのか単なる空聞きだったかの判断はできなかった。

大きな花束を受け取ると互いの前の視界が開けた。サキが見たのはバラに喜ぶ無邪気なアキコだった。

バラの色気に託した男の願いの実像をサキが目の前にしている。バラへの喜びを隠さない女は、インターン研修生を誘惑する年上女である。

満面がほころぶ顔に誘惑者の抜け目なさをサキは重ね見た。

(ツンブクツ第二部 了)